

「おや、まだ強情に虚言をお吐きだよ。それほど分つて居るなら何故禽は好いなアと云つたり、だけれどもネと云つて後の言葉を云へ無かつたりするのだエ。」と追窮する。追窮されても窘まぬ源三は、

「それ唯おいらも自由自在になつて居たら嬉しいだらうと思つたから然様云つたのサ。浪ちやんだつて彼の禽のやうに自由だつたら嬉しいだらうぢや無いか。」と云ふと、お浪はまた新に涙ぐんで、其言には答へず、

「それ、其の通りだもの。汝にや未だ吾家の母さんの妾だのが、どんなに汝のためを思つてるか、解らないのかネエ。眞實に汝は自分勝手ばかり考へて居て、他の親切といふものは無にしても關はないといふのだネ。おほかた妾達も誰も居無かつたら、自由自在だつて汝はお悦びだらうが、あんまり其の氣随過ぎるよ。吾家の母様も汝の事には大層心配を仕て居らして、も少しすると汝のところの叔父さんにちやんと談をなすつて、何でも汝のために悪くないやうに仕てあげや

ラツて云つて居らつしやるのだから、辛いだらうが其様な心持を出さないで、少しの間辛抱を御仕でなくちや濟ないツ。」

としみた、と云ふ其の真情に誘ひ込されて、源三もホロリとはなりながら、猶

「だつて、おいらも男の兒だもの、矢張一人で出世したいや。」
と、自分の思はくとお浪の思はくとの異つて居るのを悲む色を面に現しつ、正直に加之強情に云つた其の面貌は全然小兒らしいところの無い、大人びきつた寂びきつたものであつた。お浪は此の自己を恃む心のみ強い言を聞いて、驚いて目を睜つて、

「一人でつて。何様一人でもつて？」
と問ひ返したが返辭が無かつたので、直と又

「ぢや誰の世話にもならないでといふんだネ。」
と質すと、源三は術無さうに、且は憐愍と宥恕とを乞ふやうな面をして、微に點

頭た。源三の腹の中は秘しきれなくなつて、是に至つて其の繼子根性の本相を現して仕舞つた。しかし腹の底には如是いふ僻みを持つて居ても、他の好意に負くことは甚く心苦しく思つて居るのだ。これは此源三が優しい性質の一角と云はるか、いや此が此の源三の本来の美しい性質で、如何なる人をも頼むまいといふやうなのは、却て源三が性質の中の或一角が境遇のために激せられて他の部よりも比較的に發展したものであらうか。お浪は今明らかに源三が本心を讀んで取つたので、これほどに思つて居る自分親子をも胸の奥の奥では袖に仕て居る源三の其の心強さが怨めしくもあり、また自分が源三に隔てがましく思はれて居るのが悲しくもありするところから、悲痛の色を眉目の間に浮めて、

「ぢの吾家の母様の世話にもなるまいといふつもりかエ。まわ怖しい心持におなりだネエ、そんなに強くなならないでも宜さうなもの。そんな汝ぢわ甲府の方へは出すまいと妾達が仕て居ても、雁坂を越えて東京へも行きかねは仕無い、吃

驚するほどの意地ッ張りにおなりだから。」

と云つた。すると源三はこれ聞いて愕然として、秘せぬ不安の色を自から見せた。といふものは、お浪が云つた語は偶然であつたのだが、源三は甲府へ逃げ出さうとして意を遂げ無かつた後、恐ろしい雁坂を越えて東京の方へ出やうと試みたことが、既に一度で無く、二度までもあつたからで、それをお浪が知つて居やう筈は無いが、雁坂を越えて云々と云ひ中らされたので、突然に鋭い矢を胸の真正中に射込まれたやうな気が仕て驚いたのである。

源三がお浪にもお浪の母にも知らせ無い位であるから、無論誰にも知らせないで、自分一人で懐いて居る秘密は斯様である。一體源三は父母を失つてから、叔母が片付いて居る縁によつて今の家に厄介になつたので、勿論厄介と云つても幾許かの財産をも預けて寄食して居たのだから全然厄介になつたといふ譯では無いので、そこで叔母にも可愛がらるれば随つて叔父にも可愛がられて居たところ、不幸に

して其の叔母が病氣で死んで仕舞つて、繼て叔父が何處からか連れて來たのが今の叔母で、叔父は相變らず源三を愛して居るに關らず此の叔父の後妻は何様いふものか源三を宥めると非常なので、源三は終に甲府へ逃げて奉公しやうと、山奥の兒童にも似合はない賈いことを考へ出して、既に會て堪へられぬ處遇を被つた時、夢中になつて走り出したのである。ところが源三と小學からの仲好朋友であつたお浪の母は、源三の亡くなつた叔母と姉妹同様の交情であつたので、我が親かつたもの、甥で加之我が娘の仲好しである源三が終始履歷の汚れ臭い女に酷い目に合はされて居るのを見て同情に堪へず居た上、丁度無暗滅法に浮世の渦の中へ飛込まうといふ源三に出會つたので、取り敢へず其の逸り氣な舉動を止めて置いて、さて大に踏ん込んで此の可憫な兒を危い道を履ませず人にして遣りたいと思ひ、其娘のお浪はまた唯何と無く源三を好くのと、且は其の可哀な境遇を氣の毒に思ふのとの爲に、此もまたいろ／＼に親切に仕て遣る。此等の事情の

湊合のために、源三は自分の唯一の良案と信じて居る「甲府へ出て奉公住みする」といふ事を敢て仕舞いので、自分が一刻も早く面白くない家を出て仕舞つて世間へ飛び出したいといふ意からは、お浪親子の親切を嬉しいとは思ひながら難有迷惑に思ふ氣味もあるほどである。勿論お浪親子が如何に一本路を見張つて居るにしても、其の眼を潜つて甲府へ出ることは、それほど難しいことでは無いが、元は優しいので弱蟲々々と他の兒童等に云はれたほどの源三には、その親切なお浪親子の家の傍を通つて其二人を出し抜くことが出来無いのであつた。併し家に居たく無い、出世が仕度い、奉公に出たら宜からう、と思はずには居られ無い自分の身の上の事情は繼續して居るので、小耳に挾んだ人の談話から終に雁坂を越えて東京へ出やうといふ心が着いた。東京は甲府よりは無論佳いところである。雁坂を越して峠向ふの水に隨つて何處までも下れば、其川は東京の中を流れて居る墨田川といふ川になる川だから自然と東京へ行つて仕舞ふといふことを聞きかぢ

つて居たので、何でも彼嶺さへ越せばと思つて、前の月の或朝酷く折檻された舉句に、唯一人思ひ切つて上りかけたのであつた。けれども其處は小兒の思慮足らなければ意地も弱いので、食物を用意しなかつた。め絶頂までの半分も行かぬ中に腹は減つて来る氣は萎へて来る、路はもとより人跡絶えて居るところを大概の「勘」で歩くのであるから、忍耐に忍耐しきれ無くなつて、怖くもなつて来れば悲しくもなつて来る、とうとう眼を凹ませて死にさうになつて家へ歸つて物置の隅で人知れず三時間も寐て其の疲勞を癒したのであつた。そこで其四五日は雁坂の山を望んで、あゝ到底彼の山は越えられぬと肚の中で悲しみかへつて居たが、一度其意を起したので、日數の立つ中には段々と人の談話を何か耳に止さるため次第々に雁坂を越えるに就いての知識を拾ひ得た。さうすると又さう／＼と勇氣が出て来て家を出てから一里足らずは笛吹川の川添を上つて、それから右手の嶺通りの腰を段々と「なぞへ」に上りきれば、そこが甲州武州の境で、それから

東北へと走つて居る嶺を傳はつて下つて行けば、終には一つの流に會ふ、其流に沿ふて行けば大淵村、それまでは六里餘り無人の地だが、それからは盲目でも行かれる樂な道ださうだ、何でも峠さへ越して仕舞へば、と朝晩雁坂の山を望んで、其の彼方に極樂でもあるやうに好ましげに見て居た。すると叔父は山持きをするものゝ常で二三日歸らなかつた或夜の事であつた、叔母の肩をば揉んで居る中、夜も大分に更けて来たので、源三がつい浮りとして居睡ると、さあ恐ろしい烟管の打擲を受けさせられた。そこで復思ひ切つて其の翌朝、今度は團飯も澤山に用意する、錢も少しばかりづゝ何ぞの折々に叔父に貰つたのを溜めて置たを糶に取り出す、足ごしらへも嚴重にする、すつかり支度を仕て仕舞つて釜川を背後に、ずん／＼ずん／＼と川上へ上つた。やがて小一里も来たところで、さあ此邊から川の流れに分れて、もう今まで晝と無く夜となく眼にしたり耳にしたりして居た笛吹川もこれが見納めとしなければならぬといふ場處にかゝつた。そこで歳

こそ行かないが源三も何と無く心淋しいやうな感じがするので、川の側の岩の上に少時休んで、鞆と流れる水のありさまを見ながら、名づけやうを知らぬ一種の想念に心を満たして居た。さうすると何處からとも無く人語が聞えるやうなので、もとより人も通はぬ此様なところで人聲を聞かうとも思ひがけなかつた源三は、一度は愕然として驚いたが耳を澄まして聞いて居ると、上の方から段々と近づいて来る其の語聲は、復び思ひがけ無くも喉に叔父の聲音だつた。そこで源三は川から二三間離れた大きな岩の縁に裂け開けて居る其間に身を隠して見咎められまいと潜んで居ると、丁度前に我が休んだわたりのところへ腰を下して憩んだらしくて、そして話を仕て居るのは全く叔父で、それに應答へを仕て居るのは平生叔父の手下になつては持ぐ甲助といふ村の者だつた。川音と語聲と混るので甚く聞き辛くはあるが、話の中に自分の名が聞えたので、おのづと聞き逃すまいと思つて耳を立て、聞くと、なわ甲助、どうせ養子をするほど無財産だから、

喉が刺める喉の甥なんぞの氣心も知れぬ奴を入れるよりは、伶俐で天賦の良い彼の源三に乃公が有つたものは不殘遣るつもりだ。然様したら彼奴の事だから、まさか乃公が亡くなつたつて乃公の墓を草の中に轉げさせて仕舞ひも爲めえと思ふのサ。前の喉にこそ血筋は引け、乃公には縁も何も無いが、乃乃の源三が可愛くつて、家へ歸ると彼奴めが叔父さん叔父さんと云ひやがつて、草鞋を解いて呉れたり足の泥を洗つて呉れたり何や彼やと世話を焼いて呉れるのが嬉しくつてならない。子といふ者を持つたことも無いが、まわ子も同様に思つて居るのサ。そこで乃公あ、今は既持がないでも食つて行かれるだけのことは有るが、まだ仕合に足腰も達者だから、五十と聲がか、つちの身體は太義だが、斯様して持いで山林方を働いて居る、これも皆少でも延ばして置いて、源三めに與つて悦ばせやうと思ふからサ。どれ、今日は三四日ぶりて家へ歸つて、叔父さん叔父さんて彼奴めが莞爾顔を見やう、さあ、もう一服やつたら出掛けやうぜ。と高話して、やが

て去つた。これを聞いて居た源三はしくしく泣き出したが、程経つて力無げに悄然と岩の間から出て流の下の方をじつと視て居た。が、堰さあへぬ涙を拂つた手の甲を偶然見ると、こゝには昨夜の烟草管の痕が隠々と青く現れて居た。それが眼に入るか入らぬに屹と頭を擡げた源三は、白い横長い雲がかつて居る雁坂の山を睨んで、つかつかと山の方へ上りかけた。併し、忽にして一ト歩は一ト歩より遅くなつて、やがて立止まつたかと思えるばかりに緩く緩くなつた揚句、うつかりとして脱石に爪端を踏掛けたので、ずるりと滑る、よろよろと踵踏る、ハツと思ふ間も無くクルリと轉つてバツリと倒れたが、直には起きも上り得ないで先づ地に手を突いて上半身を起して、見ると我が村の方は丁度我が眼の前に在つた。すると源三は何を感じたか流の如くに涙を墜して、終には啜り泣して止まなかつたが、泣いて泣き盡した果に龍鐘と立上つて、背中に着けて居た大な團飯を抛り捨て、仕舞つて、吾家を指して立歸つた。そして自分の出来

るだけ忠實に働いて、叔父が我が舉動を悦んで呉れるのを見て自分も心から悦ぶ餘りに叔母の酷さをさへ忘れる程であつた。それで二度までも雁坂越を仕やうとした事はあつたのであるが、今日まで噫にも出さずに居たのであつた。

たい能く愛するものは、たい能く解するものである。源三が懐いて居る斯様いふ秘密を、誰から聞いて知らうやうも無いのであるが、お浪は偶然にも云ひ中てたのである。併し源三は、我が秘密は飽までも秘密として保つて、お浪との會話を宜い程のところに通し、餘り歸宅が遅くなつては又叱られるから、といふ口實のもとに、酒店へと急いで酒を買ひ、猶村の盡頭まで連れ立つて来たお浪に別れて我が村へと飛ぶが如くに走り歸つた。

其四

丁度其日は樽の代り目で、前の樽の口のと異つた品ではあるが、同じ價の、同じ土地で出来た、しかも質は少し佳い位のものである、といふ酒店の挨拶を聞いて、

若や叱責の種子にはなるまいかと鬼胎を抱くこと大方ならず、且又鹽文鯨を買つて來いといふ命令ではあつたが、それが無かつたので其代りとして鞠められた鹽鯨を買つたに就いても一ト方ならぬ鬼胎を抱いた源三は、びく／＼もので家の敷居を跨いで此の經由を話すと、叔母の顔は見る／＼恐ろしくなつて、其の鹽鯨の籜包みを手にするや否や其でもつて散々に源三を打つた。何で打たれても打たれて佳いといふものがある筈は無いが、火を見ぬ鹽魚の悪魔い——まして山里の日増しもの、鹽鯨の腐りかゝつたやうな——奴の籜包みで、力任せに眼とも云はず鼻とも云はず打たれるのだから堪へられた譯のものでは無い。先づ籜は幾條にも割れ裂ける、それでもつて打たれるので籜の裂目のひり／＼したところが烈しく觸るから、極々浅い疵ではあるが松葉でも散らしたやうに微疵が顔へつく。そこへ鹽氣がつく、腥氣がつく、魚肉が迸れて飛んで額際へはり着いて居るといふ始末、いやはや眼も當てられない可厭な窘めやうで、叔母のする事は全て狂

氣だ。勿論源三は先妻の縁引きで、しかも主人に甚く氣に入つて居て、それがために自分が此處へ養子に入れて生活状態の割には山林やなんぞの資産の多いのを譲り受けさせやうと思つて居る我が甥が此處へ入れないのであるから、憎いには飽まで憎いであらうが、一つは此女の性質が殘忍な所爲でもあらう歟、また或は多くの男に接したりなんぞして自然の法則を蔑視した婦人等は、やゝもすれば年老いて女の役の無くなる頃に臨むと奇妙にも心狀が焦燥たり苛酷くなつたり仕たがるものであるから、此女もまた其等の時に臨んで居た故で、もあらう歟、如何に源三の仕た事が氣に入らないにせよ、随分尋常外れた責めかたである。最初は仕方が無いと諦めて打たれた。二度目は情無いと思ひながら打たれた。三度目四度目になれば口惜いと思ひながら打たれた。それから先はもう死んだ氣になつて仕舞つて打たれて居たが、餘り何時までも打たれて居る中に、隙へることの出來ない怒が勃然として骨々節々の中から起つて來たので、もうこれまでと源三は抵

抗しやうと仕掛けた時、自分の氣息が切れたと見えて叔母は突き放つて免した。そこで源三は抵抗もせず、我を忘れて退いて平伏したが、もう死んだ氣どころでは無い、殆ど全く死んで居て、眼には涙も持たずにゐた。

其夜源三は眠り兼ねたが、それでも少年の罪の無さには、曉天方になつてトロリと仕た。さて目眩む間も無く朝早く目が覺めると、平生の通り朝食の仕度にと掛かつたが、其間々にそろり〜と雁坂越の準備をはじめて重たいほどに腫れた我が顔の心地悪しさを苦にせず、團飯から脚をさらへの仕度まで悉皆仕て後、叔母にも朝食をさせ、自分も十分に喫し、それから隙を見て飄然と出て仕舞つた。家を出て二三町歩いてから持つて出た脚絆を締め、團飯の風呂敷包みとおのが手作りの穿替への草鞋と共に頸にかけて背負ひ、腰の周圍を軽くして、一筋の手拭は頬かぶり、一筋の手拭は左の首に縛しつけ、内懐にはお浪に會つて貰つた木綿財布にいろ〜の交り錢の一圓少し餘を入れたのを確と納め、兩の手は空手に

して置いて、さて柴刈鎌の柄の小長い奴を右手に持つたり左手に持つたりしながら段々と川上へ登り詰めた。

やがて前の日叔父の言を聞いて引返したところへかゝると、源三の歩みはまた遅くなつた。しかし今度は前の日自分が腰掛けた岩と少時隠れた大な岩とを、やゝ久しく見て居たが其の揚句に突然と聲張り上げて、些をかした鬮子で、我は官軍我が敵は、と叫び出して山手へと進んだ。山鳴り谷答へて、何處にか潜んで居る悪魔でも唱ひ反したやうに、我は官軍我敵はといふ歌の聲は、笛吹川の水音にも紛れずに聞えた。それから源三はいよ〜分り難い山又山の中へ入つて行つたが、流石は山里で人となつたに、何様やう斯様やら「勘」を付けて上つて、とうとう雁坂峠の絶頂へ出て、そして遙に遠く武藏一國が我が脚下に開けて居るのを見ながら、蓬々と吹く天の風が頬を被りした手拭に當るのを味つた時は、躍り上り躍り上つて悦んだ。併し又振り反つて自分等が住んで居た甲斐の國の笛吹川に添ふ

一帯の地を望んで、黙然として心も味くなるやうな氣持が仕て、しかも其薄す
りと霞んだ霞の底から

桑を摘み、爪紅とした花浴女郎も桑を摘み。

と清い澄み徹るやうな聲で唱ひ出されたのが聞えた。もとより聞える筈が有
らう譯は無さるのであるが。

喜捨金

喜捨金

墨堤の花は今咲き誇つて居る。

土地の人が今朝内々で話した。其の話の大體は次の通りだつた。

ナント一寸した間にも頭を擡げたがる人間に色氣といふもの位をかしなものは無いぢや有りませんか。

花時の逆上眼で、御覽なさる通り大きな黒眼鏡を掛けて、昨日も例の通り眼鏡者通ひといふ奴で、竹屋渡へ懸りましたんです。

出るよーッと船頭が云ひますからチト慌て氣味でボンと乗りますと、私の後からも、船頭さん一寸待つて、と可愛らしい聲を掛けながら、御納戸天窓絨の鼻緒の

二枚草履を穿いた、衣服も悪くない、色の白い、意氣な、東髪では居るが普通の者では無い若い女が雁木を下りて來たのです。

船中が見ましたネ。

汚い婆様なんぞだと、得て斯様いふ時はブツつく人が一人や半分は有るものですけれど、美しい女と来たので衆人が黙つて居ました。

船は出ました。

乗客が充満なんで、私だの其の女だの、七八人か十人近くも立つて居ましたのです。乗客の中に胴の間の腰掛の正中に悪く大くなつて腰を掛けて居る大風の、盤臺面の、下品で肥つて居る、乃公は金持だといふはぬばかりの顔をした衣服の立派な小憎らしい奴が居ました。そして眞赤に酔つて居て馬鹿太い黄金の指輪の二つも穿めた手に葉巻烟草を持って喫して居るのです。迷惑なのは兩隣の人で、烟草の煙だの灰だのを浴せられるばかりでは無く、薄外套の袖の下に押付けられてしまつて、まるで家隸かなんぞのやうにされて酷い目に逢つて居るのです。耐忍をして何も云はずには居るのですが、其の男が無遠慮に身動きをする度、顔を覚めて

迷惑がつて居るので、口にこそ出さないが、乗合の人は誰も其の盤臺面の男を憎い奴だと思つて見て居たのです。

すると船が川中へ出た時分に例の一錢蒸汽が通りました。御定まりの餘波のウネリが此方の船を煽ると、何程船頭が調子を取つてもユラユラと揺く、立つて居たものは皆誰もヨロヨロとしましたネ。私も危く倒れるところでしたけれど、其處は男子だけに踏み堪へましたが、前に申しました私の後から来て船に乗つた女ですネ。ヨロツと踏躓めいた一歩、二歩にまだ止り兼ねて、丁度其處へ出して居た其の盤臺面の男の足を踏んだので、途端に、済みませんと挨拶した言葉だけは豪氣に氣が利いて居ましたが、女の悲しさには踏躓けた擧句をハツと思つて足を退いたから堪りません、今度は全く中心を失つて仕舞つて、男の膝の上へ諸に倒れかゝりました。

若し私が倒れたのだつたら何様な事でしたらう！盤臺面の奴さんめドス鼻を振り

立て、剣突を喰はせたか、拳骨を振り擧げて顔面を揉いたか、知れたものぢやあ
 有りあ仕ません。ところが、程の好い、色つぼい女といふもんで、馬鹿に惚く出
 たもんです！まづ突壁に、危い、と云ひながらヤンワリと女の身体を抱いて遣つ
 たものですネ。それから、オヤマア何様しましやう、飛んだ魚怒を致しまして、
 と、女がサツと顔を紅くして謝罪もすすと、奴さん豚が鼻嵐を吹くやうなボア
 ツとした聲を出して、ナアニ宜うとあす、掛けさせて上げなかつたから悪うとあ
 いました、と何處の郷訛りだか知りませんが變な言葉でもつて、可い白癡ぢやあ
 有りませんか泥草履で足を踏まれながら自分の方で謝罪つて居るのです。そして
 腹を立つてケロケロ鳴きをする七面鳥見たやうに悪く大きくなつて場を占つて居
 た奴が急に肩を窄めて押立尻を仕て横つ倒しに身體を涙つて、ボツチリばかり漸
 と明け得た腰掛を頸で指しまして、サア此處へ御掛けなさいッ、と大デレに優し
 いのですナ！で、私をはじめ其の體を見たものは皆眼の中を痒がらせられて、ッ

フンと笑ふ奴もされば、ヘツと笑も者もあり、わざと水の面を見ながら、エー
 ンと嘲弄面に大きな咳嗽を仕た畜生さんも有りましたよ。

女は割に感じ無い風で、たゞもう従順に女らしく、有り難うございませと會釈し
 て腰を下しました。ギッシリ詰まつて居たところなのですから、いくら盤臺面が
 小さくなつても然様融通は付きません、女の腰は中天に浮いて居る位なのです。
 そこで奴さん身體をもづ／＼させては場を廣げて遣らうとするので、いよ／＼迷
 惑なのは隣りの人です、盤臺先生にもづ／＼される度に嫌な顔をしては同じくも
 ぢ／＼して居るのです。眼が悪くつて醫者に勧められて如是黒眼鏡を掛けて居ま
 すが、黒眼鏡といふものは異なところのあるものです。此方の眼が何處を視て居
 るのだから全然他の人には知れないのですからネ。自分の眼の行くところを人が視
 るだらうと思へば、シートと人の顔を見たりなんぞするといふことは出来ないも
 のですア。其處を黒眼鏡の御蔭でもつて、此方の眼が何處を見て居るか他人は知

らしいと思ふと、遠慮も斟酌も無しに何時までも何時までも他人の顔が見て居られるのです。

で、他の人等は盤盃面の仕打を可笑いと思つて腹では笑つて居ましたが、然様然様其の顔を見て居る者も有りませんでした。が、私はつくづくと其の支那國見たやうに危然と大きい變な顔を視て、僅に土堤から堀までの間の此の船の中で何様な下らない事を思つて居ればこそ其様な下らない事が出来るのだらうと思つて感心して視詰めましたところが、奴さんの眼の中の酒氣と色氣とで妙に濡れたやうに表光が仕てチロリとチラついて居るさななで、上手な油書にも描いて無い面白味があるのでしたよ。ほんとに如何な下らないことを思つて居たものでしたらう！

アタリますよと常式の聲が掛つて、船は山谷へ着きますと、人々は忙いであがりました。變なものですネ人間といふ奴は！ 軍人だの學者だの、いろくの素

い人も居るのでしやうが、渡船から別れ々々になるところなぞと來たり、體裁は有りませんや、何の事は無い誰だつて彼だつて、宛然袋から零れる炒豌豆見たやうなものでさア。

豌豆と豌豆とに縁は連がつてや爲ません。バラ、バラ、バラで、東、西、南、北、轉ける方へ未練無しに轉げます。

書生さんも何方へか轉げました。職人も何方へか轉げました。其の盤盃面の奴さんも矢張何方へか轉げました。

私は私の志す方へ行かうとして山谷堀の北側を吉原堤の方へ行きますと、私の先へ立つて今の女が行きます。

跟く氣ぢやあ無いが跟いて行きましたのです。たゞ轉げる方向が同じだからでした。女は不圖振りかへつて私を見ました。私は黒眼鏡の中から何の氣も無く視てましたが、見たか見なかつたか何様な眼つきを爲たか先方には空末も分らなかつた

でしやう。

女はさつさと行きます。私もさつさと行きました。女はまたフツと顧兩つて私を一寸見ました。

女は先に立つて、私は後に跟いて、また少し行きますと、また女は顧兩りました。今度もたしかに私を見たのです。しかし今度は私を見たばかりでは無く、何でも何處か知らんを意味の有る眼で見ましたやうでした。何處を見たのでしたか知れませんでした。三間ばかりの距離でしたからチラリと動いた眼の中が鮮やかに然様解めました。

もう今芳原堤へ上らうといふところへ掛つた時、突然に私の背後から来た者が私の袂に解れたので、何だか知らと振顧つて見ると、フツク帽子を被つた若い男が此方の面を見てニヤリと笑つて、額をシヤクツて無言で挨拶——好意的らしい——を爲て、いそして横の方へ突と外れて仕舞ひました。

それは盤面先生の隣に居て迷惑して居た男でした。

前を見るとお納戸の鼻緒の草履を穿いた薄生意氣の女はもう見え無くなつて居て、私の袂には一圓紙幣が二枚有つたのです。

そこで醫者の家へ直に行かずに淺草の觀音様へ詣りました。二圓の金は福田會育兒院の喜捨金受取函へ……。

それから私は考へましたね、黒眼鏡は何様も明るくないつて。ハ、ハ、ハ、ハ、。

其佛今樣八犬傳

其佛今様八犬傳

(慈親會館興の滑稽素人演劇の爲に)

一、犬塚家の一室

小間使おべちや電燈の光にて一心に小説を読み居る。小間使おくちや室内に入り来る。

おくちや「オヤマアおべちやさんは、何處へ行つてお出かと思つたら復こんなところへ入り込んでお居だつたの。此様いよお座敷の電燈の下で、異う澄まし込んで小説を読んでるなんて、ヘン、好いお嬢様で居らつしやる事ネ。」

おべちや「似合つて？」と令嬢らしく嫌に氣取る。

おくちや「おふざけで無いよ。人を馬鹿にした。」と書を引奪つて抛り出すと、

おべちや「アラ、今やつこのことと思ふ人と夫婦にならうといふところぞ、酷い事

オ。」と恨めしう云ふ。

おくらや「何だオエ、其の書の中の人の事だらうぞや無いか。そんな事は何様でも宜しワネ。カントにそれどころぢやあ有りや仕ない、昨夕も今夜も送別會だが、

らよ〜犬塚さんは明日御出發になるのだよ。」

おくらや「オヤ然様。お力落し、お氣の毒なま〜。」と冷淡に云つて、

「雨の十日も降れば宜しオ。」

と小さく歌つて冷かす。おくらやおくらやの袖を荒く曳いて曳き倒し、

おくらや「人、をかしくも無い！茶にして居るのかエ？お前さんは彼程犬塚さんと思つて居らつしやるお嬢様と御懸然だとは思はならぬ。ほんとに小説なんかにもる話でござやも無らざやも無らか。」と腹巻となりて云ふ。

おくらや「そりやあもう然様には遠ひ無いが、だつて仕方は無いやオ。犬塚さんは吾家の旦那様に旅費まで出してお貰ひなすつて洋行なさるのだもの！これも御願

父様からお持傳へになつた珍らしい大きな金剛石とかを、巴里の寶石鑑定所へ持つて行つて其所の鑑札を取つて、そして歐羅巴で賣つて大金持になつて、それからゆる〜と好きな學問も爲さりやあお嬢さんと御夫婦にもお成りなさらうといふのだから、何様も少の間の別離は仕方が無いと思ふよ。今は云はゞまあ食客で居らつしやるから、大學を御卒業なすつたのでも何でも仕方は無いけれども、其の金剛石が賣れて大金持にさへ御成んなされば、吾家の旦那様だつて悦んでお嬢様のお婿になさるだらうぞや無いか。」

おくらや「よお其が然様と定つて居れば宜いだけけれどもオ、實はお前、吾家の旦那様の御腹の奥の方にやあ……。」

おくらや「オヤア。」

おくらや「金剛石を假託に體好く犬塚さんを歐羅巴へ送つて仕舞つて……。」

おくらや「オヤア。」

おくちや「お嬢様に横懸幕を仕て居る、大臣の息子さんの、ソレアノ箱上宮六さんと云ふ幾なハイカラさんネ。」

おへちや「オヤア。オヤ、オヤ。」

おくちや「彼の人を議員の軍木五倍次さんが骨を折つて取持つもんだからネ。」

おへちや「オヤ。オヤ、オヤ、オヤ。」

おくちや「無理往生にお嬢さんに押付けやうといふ魂膽が御有んなさるのだよ。」

おへちや「オヤマア、オヤマア、オヤマア、オヤマア、何んていふ酷い旦那様だらう、何様しやう、ほんとに犬塚さんがお感然で仕方が無いッ。」

と仰山に身悶えする。

おくちや「妾やお嬢様が御感然で〜。」とぐそをかく。

おへちや「え、え、え、え、え。」と思々しがりて悶える。

おくちや「ハッ、ハッ、ハッ。」と涙りあげて泣く。

紳商犬塚裏六ぬつと現れて二人を見、

裏六「これ何を仕て居るのだえ？」

おへちや「ハ。ハ。」

裏六「へ。へでは無し。何を仕て居たのだ？」

おくちや「アノー、ソノー、アノ何でござります、一寸芝居の真似を致したのや。」

裏六「何だ下らない。併し素人にしては大分巧いやうだな。」

おへちや「どうかからか本郷座あたりで演れましやうか。」

裏六「何を云ふのだ、彼方へ行け。」

おへちや「ハイ。」と小説を持ちて去る。

裏六丸火鉢の傍に坐り、巻煙草盒より煙草を取り出し吸ひながら考へ事をす

次の間の置時計の音十一時を報ずる。妻六戯へて、

妻六「ハテナ、もう来さうなものだが……。巧く行き兼ねたかな。大抵巧く遣りさうなものだとはおもふが。」

妻六妻龜篠、おべちやと共に茶菓を持ち来る。直におべちやを手づかいて選かしむ。妻六薦めらるゝ茶を啜りて、

妻六「濱路は寐たか？」

龜篠「頭が痛い」と云つて就眠したが、大方床の中でまじくとして無益な事でも思つて居るのでしやうと思ひますよ。」

妻六「馬鹿な奴めだ、下らない。それはさうともう網干が来さうなものだと心待ち待つて居るのだが……。」

龜篠「然様ですネエ、もう来さうなものです。だが彼の人の事ですから案じる事はありませぬ、今夜を越しちやあ宜けないんですから何様にかして巧く遣つて来ませう。」

しやう。」

妻六「然様さナア、併し犬塚めも大切に爲切つて、用心に用心して居る實物の事だから。」

おくちや入来る。

おくちや「犬塚様が御歸りになりました。送別會でもつて御飲過ぎになりましたか、ついで無い正體無しに御爲りなすつて、網干様の御介抱でやつと御歸りなすつたので、直と御室へ掻き込んで只今御就眠せ申して居ります。網干さまは此處まで来たものだから一寸御挨拶を仕て歸らうと仰あつてです。」

龜篠「信乃はマア其様にべろくになつてかエ？」

おくちや「ハイもう全然性無しにおなんなさいまして……。」

妻六龜篠顔を見合せて巧く行つたと悦ぶ思入

妻六「フン、犬塚は寐たら寐かして置くが宜いサ。さあ、網干さんに、御遠慮は

要りません、直ぐと此方へと申しな。」

犬塚家出入辯護士網干左母二郎、羽織袴の些にやけたる打扮にて、來かゝり
しまま襖の外より、

網干「イヤ只今これへ。」

と老居じみて云つて、

網干「ハ、ハ、ハ、ハ、これは我知らず大分酔つて居るので」と自ら笑ふ。

おくちや襖を開く。網干ずつと入る。龜篠おくちやの茶菓を薦むる間、略し
たる一ト通りの挨拶めつて、

龜篠「今日はまた犬塚の送別會に、貴下は幹事の御一人になつて下さつた事とて、
定めし色々御骨折でございませう。」

網干「特別に骨折の事もございせんでしたが、昔か酒量を獻すもんで、犬塚君が
甚く酔はれましてネ、それから御介抱申すのに些許り……。」

と意を含めて云ふ。おくちや此間に龜篠の顔を見、用事の無さに黙つて退く。

龜篠「然様でございしたか、それは御弱りでしたらう。」と大きな聲で云つて、お
くちやの全く去りしを見、額をさし出し、低聲になつて、

龜篠「して一件は巧く行きませうたらうネ。」

網干も近寄つて聲を低くし、

網干「其りやあ違算は有りやあ仕ません。壯士の土井の土太郎に好い加減のことを
云つて、犬塚君に手強く搦んで、も酒を強ひるやうにさせて、とうとう盛れ潰し
かけた上、別室で倒れさせて、水を欲しがる矢先へ一寸とした手品をして冷水を
飲ませ、それから先は此方の仕たいま。人目には親切に介抱すると思はせて、
御依頼の通りに犬塚が寶の、稀有の金剛石は此方へ捲き上げ、似つこらしい硝子
の切籠玉をうまゝと替玉、危い橋を渡り果せて首尾能く此通り。」

と仕方話を仕ながら終に懷中を探つて寶石の小匣の包みを出す。龜六受取つ

て大に悦び、

妻六「御手柄々々々、おツア有り難い。此こそ信乃が祖父匠作が、其昔業筑灘の神
中で、難破した印度の商船の、たつた一人の生存者の、シエンワウ、といふ黒奴
から、其奴の病死の時介抱の禮に、貰ひ受けたと云ふ寶石。暴風村雨、恐ろしか
つた日の記念として、村雨と名づけて秘藏したもの。形鶏卵ほどある大きな金剛
石、其價はとんど測り知られず。何十萬弗か何百萬弗、年來心掛けて今日手に入
る！」

と云ひながら包を解き匣を啓けば中より奇光サツと迸る。

龜藏「マア美しい！」と恍惚とする。妻六復舊の如くに癡つて、

妻六「御苦勞でした網干さん。珠はたしかに。」

網干「御渡ししました。」

妻六「いかにもしつかり受取りました。」

網干「此上は御約束通り濱路さんど。」

妻六「念には及びません。屹度あげます。犬塚さへ歐羅巴へ送こくつて仕舞つた」

龜藏「其の曉になれば家の婿君。」

網干「では其迄は氣取られぬやう。」

と言ひかけて、氣を更へて急に軽く

網干「では今夜はこれで失禮致します。」

妻六「然様なら、甚だ何様も失禮致しました。」と立つて送りかゝる。

網干「何様か其儘々々。」

と辭して行く。龜藏だけ送りて一寸蔭に入り、直復引返して來り、

龜藏「巧く行きましたネエ。」と笑ふ。

妻六「然様サ。先づ此れで狂言の筋は運んだ。厄介者の犬塚めは硝子玉を抱いて、
歐羅巴三界ほつき歩いて、乞食にでもなるだらうが、巴里の寶石鑑定所の鑑定も

其儘今様八犬傳

「絲瓜も無い、硝子玉だと云はれたら腰でも抜けるだらう。ハ、ハ、ハ、何とまあ宜い業晒しぢやあねえか。御爲ごかして出して仕舞へばもうさつぱりと厄介拂ひだ。」

「大臣の簾上さんの御子息の宮六さんを婿にはする。珠は巻上げる。ほんとに此様な嬉しい事は無いのだけれども、簾上さんを入れたら綱干が怒るだらうネ。」

「何怒つたつて齒も立つものか。珠の一件の底を割りやあ自己の身がまづ破滅なもの。縁邊の事は當節柄、親の威光でも仕方はない、と手放しに云つて仕舞へば其限りの事サ。濱路で釣られたのが彼奴の不覺だ。二歳の癖に悪く伶俐がりやあがつて、ハ、ハ、ハ、何とまあ彼奴も宜い業晒しの頓癡奇ぢやあるめえか。」

「ホントに妾の何だけあつて頼もしいほど分別の逞しい、腹膨れ、太つ腹の墓六さん。何でもかでも一ト呑だネ。」

「汝も浮世の泥に汚れて、感心に人の歎きなんぞには針ほども感じない、靈魂に堅い甲羅の生へた龜孫だナア。」

「そりやあ褒めておくれなのかえ？」

「さうさ褒めたのサ。」

「何だか變だネエ。」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、何様だつて。」

「ホ、ハ、ハ、然様さねえ。氣にする事もない！」

「まあ、芽出度いから一ツ祝つて」

「飲みましやうかネエ。」

「ウン宜からう。」

二、歸路

「今日の大骨折つて、臺六めの依頼で犬塚の寶石をすり換へは爲たが、何様して彼の狸老夫め碌な奴ぢやあ無い。娘の濱路を囮にして、此の綱干に一盃食はせる氣だか何だか知れたもんで無いから、チャアんと一手先へまはつて、

一つ餘分に眞物をこしらへて置いて、眞物の方は此鼻が巻き上げ、見事に有り難く頂かせて遣つた。へん氣の毒だが本尊様は此處に斯様おいでなされる！」

と懷中で包をほどいて匣の蓋を一寸取ると、光輝赫奕として闇にきらつく。

網干「呉れて遣つたのは彼りやあ電氣仕掛。とも知らねえで慾に目が眩み、悦びかへつて能書まで饒舌つた老夫老婦の種弛み顔は、ハ、ハ、ハ、吹出したい程をかしかつた。よしんば此事がばれたにしても、やかましく云やあ彼等の身の破滅だもの、此の網干様に齒も立つものか。天保生れの禿顏の癖に、明治ッ子を白癩に仕やうなんて度胸が宜過ぎる。硝子の鏡片を珍重して、今頃は悦び酒でも飲んで居るだらうが。フ、フ、フ、何とまあ彼奴等も宜い業晒しの頓癡奇ぢやあ無えか。フ、フ、フ、。」と高慢に笑ふ時、按摩の笛の音聞ゆ。すると急に澄ましかへつて、

網干「趙氏連城の壁、由來天下に傳ふ。」と洋杖を振り、詩を吟じて去る。

三、犬塚邸庭内離れ座敷

龜篠塲文學士犬塚信乃室、檐近く櫻木瓜など咲き居る。内は油畫の額、裸體美人像、洋書棚、花瓶、美しき曆日表、机文房具等都てハイカラ式、トランク、提革靴など旅行用具一隅に置きある。風防の屏風の蔭に信乃眠り居る。

濱路、母屋より飛石傳ひ、前後見廻し枝折戸をわけ、又石を傳ひ、静かに來り、左思右思して躊躇ひし末、戸口に寄りて

濱路「信乃さん、信乃さん、アラママ寐坊ネエ、シーノーさん。」

と聲は大きくせねども力を入れて呼ぶ。

濱路「ママ厭だこと、矢張り起きなくつてよ！ 詩や歌の好きな人なんかは、寐られないで居るなんていふのが可愛らしいのに、グウ〜寐て居るなんて、詩人的で無いことネエ。信乃さん、信乃さん、シーノーさん。」

一つ二つ戸を叩きしが音の響くを厭ひて、下に不圖心づき、檐や蔕に近く咲ける櫻の嫩樹を揺ると枝々檐に觸れ蔕に觸れてざわ〜と音し、花吹雪美

しく散る其の中にて復呼ぶ。信乃眼さめて戸を開く。濱路は一寸隠る。信乃酒氣猶聊か残れる如く、戸を明け終ひて外を眺め、

信乃「信乃さんくと呼べれたと思つたが……ア夢だつたか知らん馬鹿々々しい。

有明の月に花明り、それを夜が明けたと早合點したのも猶馬鹿々々しいが、ア、

頭が痛い、ン、まだ酔つて居るやうだ。昨夜は實に甚く飲まされた。ドレ烟草でも吸はう。」と、燧木を擦ると、櫻の花房飛んで来て、燧木の火それに消ゆる。

信乃「オヤン。」

濱路「ホ、ホ……。」と姿を現はす。

信乃「ア、矢張夢ぢやあ無くつて濱路さんが其處に居たのか。サアその此方へ御入りなさい。」と四邊の物など片寄せながら、

信乃「それにしても濱路さんはさあ、まだ夜も明けるのに程のある、今時分此處へ何しに御出？ 見る目の無い丈に嫌疑を惹かす。私は構はないが貴様には、詰

らぬ嫌疑を受けたら不利益でしやうのに。」

濱路「信乃さん、そりあまの何を仰ある！ 何しに來たとは餘り冷淡です。御父

さんの御心が御心ゆゑに、然様仰あるのも無理ではありませんが、一旦は御父さ

んも許して下すつて、約束の仕である二人ぢやあ有りませんか。日來は何様でも

よいとして、明日は御出發、もう今日限りで當分御別れ！ それなのに知らず顔

に妾を外にして、黙つて立つて御仕舞ひなさらうとは餘りよ餘りよ。嫌疑を惹か

うともペンキを塗らうとも、不利益でも何でも、そんな事を構つちやあ居られや

しません。妾やあ利益問題で此處へは來やあ仕ませんよ。」

と信乃に近く坐して怨む。信乃は机近く坐りて、無意識に机の上の物を代る

代る取つては置き取つては置き、拵くり廻してまご／＼しながら聞き居る。

今度は丁度座傍にありたる銀笛を手にして笏に取りなどしつゝ、

信乃「濱路さん、謝します。然様云はれて見ると私が悪いやうだが、伯父さん叔

母さんが目録立つて、二人の間を疎隔させやうと仕て居らつしやる、其中なものだもんで談話も出来なかつたのです。貴嬢の精神を私は知つて居ます、私の精神も貴嬢は知つてらつしやるだらう、歐羅巴と云つたつて僅二三千里、四月か半歳には歸つて來ますから、歸つて來る日を待つて、下さう。」

と洋笛を擱く。

濱路「イエイエそれは虚言なのよ。一度此の家を出て御仕舞ひなすつたら二度とは歸つていらつしやりますまい。妾の二親は貴郎を遠ざけたがり、貴郎はまた妾の二親に愛憎を竭かしきつておいでなさるし、大學の濟ひまではと耐へて居らつたが、歐羅巴へいらつしやれば籠を出た鳥、二度ともう可厭な家に居る要は無いと、思つて居らつしやるに相違ありません。然様すれば今日が限りの御別れにもなります。元來妾は此の家の實の子では無く、兄も有るとは聞いて居ますが、君信不通で名も知りません一人ぼつちの頼りの無い身、御父さん御母さんは彼の通

りの話にならない拜金主義、たゞもう貴郎と一緒になつて、楽しい家庭の人になる日を待ち焦れて居たのに、打棄つて仕舞つて行かうとは餘り冷淡です。」

と泣く。此の間信乃はテレてもづ／＼しながら机の上の筆筒筆、總の付いた竹の紙刀ナイフなどを順々に手に取つて弄り廻はして居るのを、濱路はまた身に染みて妾の話を聞くと云はぬばかりに、話を仕ながら時々機にかゝつて順々に引つ奪つては取り棄て、最後に洋笛を取りうとすると、此は信乃柔らかに離さずに居る。それを無理に取らうともせず、吾が手を掛けし笛の上に伏す氣味に泣く。

信乃「何も打棄つて仕舞つて行かうといふのでは無いが、別に何様も分別も思案も無しので……」

濱路「思案の無い事は無いぢや有りませんか。妾が思ふ百分一も貴郎が思つて下さるならば、斯様斯様いふ譯が有つて、もう此家へは歸らなう、さあ濱路一緒に歐

羅巴へ行けと云つて下さつても宜い譯だと思ひますよ。虚偽でも騙詐でも一旦許された仲です、夫です、妻です、誰が何と云ひます。然様すれば妻も乾度其の覺悟をして、奈良の旅籠や三輪の茶屋のこんな古臭いのぢやありません、アルプスの山、ヴェニスの水、ハイカラの道行でも何でも為やうぢやありませんか。」

と洋笛と二人で持った儘、引いたり引かせたり、こぢるやうにこついたり仕て懐告る。信乃は投首歎息して、

信乃「そりやあもう貴嬢の言葉は悉皆道理だが、今度の私の旅行は伯父様伯母様の御指揮で底意は私を逐出さうが為め、それに 愁な事を爲出しては却つて不利益、おとなしく私が出て行くのも貴嬢の爲なら、じつと堪へて留まつて下さるのも私の爲。縦ひ少時分れても心さへ變らなければ未には必定ネ……ネ……。御父さん御母さんの目にかゝつて何とか彼とか詰らんことを云はれぬ間に、さあ彼方へ歸つて……。」

と洋笛を取つて仕舞つて膝し返さんとする。

濱路「嫌よ〜、犬塚さん、妾一人で残るのは厭よ。何様あつても妾やあ……。」

と却つて通り近づく。振り睡して信乃は笛を振り上げて打つやうな真似を爲し、一ト膝引いて居丈高に屹度爲り、

信乃「濱路さん、開分が無さ過ぎる、御たしなみなさい。海老茶の袴も穿いたものが、無教育の女のやうに何たる事です！ 歐羅巴へ行つて鑑定を受け、寶玉さへ賣れば後は安樂、二人が理想も現實に爲得るのに。たま〜伯父様御夫婦の許可を得た出世の首途を妨げするならば妻では無い、犬塚信乃には仇敵である。」

濱路「烈しく泣き悲み、

濱路「ア、ソ情無い、情無い！ そんなら信乃さん、妾は貴郎の、御言葉に従つて待つて居ましやう。何様か御旅中恙なく、船路に風波の難も無く、新嘉坡や馬耳塞、ところ〜の繪葉書に、御無事の便を聞かせて下さい。そればかりを樂し

みに淋しく朝夕を送りましやう。どうぞ身體を御大切に、時候の變る邦々で寐冷なんぞをなさらぬやうにと心ばかりの餼物、妾が拙い手細工ですが、信乃さん笑はないで取つて下さう。」

と白きフラネルに赤き心形繋ぎの刺繡ある腹巻を袂より出して渡す。

信乃手に取りてひろげ見、

信乃「こりゝ有難い、衛生の爲には至極よきやうなネルの腹巻。たい清らかな眞白な地に、赤い心の刺繡模様、濱路さんの胸の温かさを、肌身に添へて長い旅。」

濱路「千里の果さでも御傍に随つて、一寸の間も。」

信乃「離さず、」

濱路「離れず、」

信乃「思ひ、」

濱路「思つて……」

信乃「濱路さん！」

濱路「信乃さん！」

信乃「エ、エ、エ、もう、何様したら宜からう、宜いでしやう。」

と終に二人相擁せんとするところへ、犬塚家食客犬川莊介、ライオン齒磨を長い齒刷毛にて豪傑風に緩々と使ひながら、枝折戸の外、家の横手へ出來り、不圖此の態を見て復態と此方を見ぬところに退き、

莊介「エヘン、エヘン、エツヘン、ガーツ」

と大袈裟に咳嗽拂ひを爲たり痰を爲たりする。二人は驚き退き、室の電燈は消える。

莊介「犬塚さん、犬塚さん、まだ寤めませんか。今日は些早くても御起さなさい、夜が明けましたぜ。」

信乃「ン、犬川か、僕も眼覺めたよ。」

莊介「ぢや徐々御起さなさい。僕も御供の支度を仕ます。」

と態と下駄をがたつかせて去る。

信乃「さあ此間に。」と濱路を歸しにかゝる。濱路猶柱に拵み、枝折戸に拵み、結局枝折戸のところにて信乃を見返り、雙方眼を見合せて……

四、犬塚家の一室

おへちや「へーエ、此處が神戸で此處が長崎ですかネー。」

おへちや「それから上海、香港でございませうかエ？」

濱路「ア、然様なのよ。」

と世界地圖を前にしたまゝ、懶げに點頭く。

おへちや「オヤ、それぢやあ日本は長崎ヲ限りなの？ 餘り小ぼけて嫌な事ネ。」

おへちや「おへちやさんが氣息を入れてブーツと吹くと膨れて大きくなるとサ。」

おへちや「おからかひでないよ。下らない！ それから香港のよまは？」

おへちや「妾が教へて上げやう。新嘉坡サ。」

おへちや「おへちやさんは記憶が宜くつて何でも知つて居てネ。それから其先は？」

おへちや「ペロンゴ。」

おへちや「ペロン？ 幾な名の土地ネ。お嬢さん興實でございませうか。」

濱路「ペナンの事だらう。ペロンといふところは有りやあしなさいよ。」

おへちや「いやなおへちやさんだよ、宜い加減を云つて。」

おへちや「でも其から先は間違へずに知つてますよ。ペナンからクロンゴ、クロン

ホからスエズだ。」

おへちや「怪しかあ無くつて？」

濱路「眞實だよ。」

おへちや「それ御覽！ それからスエズの次がコールセットだ。」

おへちや「御嬢様が洋服の時御召しなすつたもの、やうな名だネー。」

濱路「ホ、ホ、ホ、コーンセットがやめ無うよ、ボートセイドだらう。」

おんちや「ほら又間違つた。しかし能くおぼえた事ネ。」

おんちや「だつて御嬢様が幾度と無く船の寄るところぐを勘定なすつちやあ、あめまだ遠いネーと仰おるのだもの。」

おんちや「もう大塚さんは日本を御離れだらうかしら。」

濱路「あらよ、今頃は儘にこゝらの海を走つておらでの筈だよ。」

と地圖を指さす。

おんちや「へーエ、お嬢様にはさあ能く解ります事ネ。一體日本から佛蘭西とかやでは何の位離れて居るのでござらしましやら。」

おんちや「それだけは間違ッこなしに儘に知つてゐるよ。」

おんちや「何の位離れて。」

おんちや「二尺五寸ばかりよ、ホ、ホ、ホ。」

濱路「ホ、ホ、ホ、おんちやは人が悪いネ。」

處へ龜篋何か奇麗な箱を持ちて入り来る。

龜篋「濱路や、卿些は心持も宜いかネ。」

濱路「何様も何だか頭が重くつていけせん。」

龜篋「御醫者様の藤田博士も仰あつたよ。別に御病氣が有る譯では無い、詰り當時流行る神経衰弱なんだつて。」

濱路「自分でも然様だらうと思つて居りますよ。」

龜篋「困るネエ、下らない！ 其様な病氣は廢してお仕舞ひよ。博士も仰あつたが、欲張り婆だの、高利貸だの、あばずれ藝者などは神経衰弱にはならないつてネ、卿も些勢を御出し！」

おんちや「へーエ神経衰弱といふ病氣は然様いふものでござりますかネ、しかし妾等なんぞは神経衰弱には爲りつこわりません。」

龜篠「汝等は元氣過ぎて喧ましくつていけない、少し神経衰弱にでも罹つて呉れると可い。」

おくら「オヤ大失敗なこと！　ぢやあもう成丈黙つて居りましやうよ、ネエおへちやがん。」

とツンと膨れて尻を向けておへちや共々澄ます。龜篠取り合はず、

龜篠病氣は病氣として、ネエ濱路、昨夜も話して聞かせた軍木様からの御話ネ。」

と話し掛ける濱路ははや顔を盛り横を向き、

濱路「御母さん其御話なら既止して頂戴。」

龜篠「止して頂戴なんて、そんな我儘を云つても、誰の爲でも有りません悉皆卿の爲の事です。昨夜も云つて聞かせた通り、信乃は悪い藝妓に相思が出来て居て、體好く吾家を逃げて行つて仕舞つたのです。毫末も彼に義理なんか立てるには及びません。今に御覽、其の不品行の手段を抑へさせに眼隨て遣つた莊介が歸つて

来て、動きの取れない證據を擧げて来るから。ですから信乃の畜生の事なんかはもう打棄つてお仕舞ひ。」

おくら「タ、一口に打棄つてお仕舞ひつて、まるであきらめの宜い人が紙屑で

も打棄らせるやうネエ。」

と大不平。

おくら「そこが神経衰弱なんかには御爲りなさらぬ結構な御氣象のところぞネ。」

龜篠「何だエ汝等は餘計な口を出す。彼方へ行つてお出。」

と殿しく叱る。二人は去る。

龜篠「ネエ濱路。そこで軍木さんからの御談話の事だがネ。大臣さんの筈上伯爵の御息さんと云へば、卿も藝妓の園遊會の時に御目にかつて知つて居るだらうが、洋行も何年か成すつた大のハイカラの方サ。其方が卿を是非にとは豫てからの御話だつたが、憎い奴でも犬塚は居たし、御父さんは義理堅いから断つて御坐

だつたのだよ。ところが今度犬塚は吾家を出て仕舞ふし、軍木さんは骨を折つて切りに口を御利きなさるし、もとより願つても無い良い御縁なので断りきれ無くなつて、御父さんも昨日終局、それなら婚げますと御約束なすつたのサ。」

濱路「此時まで地圖をのみ見居しが、約束と聞いて、

濱路「エ、ツ。」と驚く。

龜篠「驚くことは無いよ、御約束なすつたのサ。」

濱路「ア、軍木さんに御約束を？」

龜篠「然様サ、軍木さんに御約束をサ。」

濱路「妾を箠上宮六さんにあげますと云つて。」

龜篠「然様サ、結構ぢやあ無いか、御悦びなさいよ。先方は巾利の大臣さんの御總領だよ。そして、これ御覽、御約束の印に軍木さんの御手から此を下すつたのだよ。大した腕環ですよ、黄金ですよ、白金ですよ、金剛石ですよ、紅寶石ですよ、

サファイヤですよ、真珠ですよ、まわ見事な立派な奇麗なものぢやあ無いかね。」

と箱をわけて見せる。

濱路「妾を箠上さんにおげるつて約束するなんて、餘りだワ、餘りだワ、無茶だワ、無法だワ。」

と怨み嗔りて手にせし地圖を扯破り、

濱路「いくら御父様のなすつたことでも其様な事ツて有りますか、人に承知もさせないで約束するなんて、壓制です、残酷です、越權です、没常識です。犬塚さんが悪からうと箠上さんが善からうと、人、大きな御世話です、妾お信乃さんをお愛してゐるのですよ！」

と自棄に大聲に云ふ。龜篠呆れる。

濱路「戀愛は神聖です、不法の干渉なんかは受けられません。あんな三吋半のハイカラを付けて顎を擦りむいて居る箠上さんなんか、御母様が其様に好きなら御母

様御嫁にいらつしやい、ホントに馬鹿々々しい！」

と破りし地圖を畳に抛げつける。

龜篠「いけませんよ、そんな事を云つて。慾を知らなくつちやあ身が立ちません。學問を仕た揚句が詩を作るなんていふ、あんな信乃みたやうな意久地無しと一緒になりたがつて、貧乏を仕たらまの何様御爲のつもりだえ。此の世の中は汝等の思つてるやうな長閑氣なものぢやありません、花より團子、色氣より食氣ぢやあ無いか、落魄れて御腹の耗つた時を考へて御覽なさい、蝶々だの葉だのが御膳の御副になりませうか。」

濱路「何でも宜うございます、妻お妻です。」

と立つて去らうとする袂を取つて引戻し、

龜篠「然様云はしては置けません。いくら卿は卿でも、親は親ですよ。フン、卿等のやうな當世娘は、ほんとに鉄葉の當辨當箱だよ、學校磨れに磨れて居て、さう

して、悪く四角に出たがる！ だが根が薄筈だ、お母さんが今叩き潰してあげるよ。まあ下に坐つて私の云ふことを御聞き！」

と引据ゆる。

濱路「イ、エ何は無くつても宜うございます。」

と又立たんとす。腕く手先に腕輪の觸るゝを腹立たしさうに取つて投ぐる。

それにグツと怒りをなし、

龜篠「強情な兒だネエ。」

と争ひかゝるところへ先より立聞きし居し藝六入り來り、二人が間に坐して泣聲作り、

藝六「龜篠もう何も云ふな、悉皆乃公の分別が足らなかつた故だ。親の心を子は知らずで、利益を思つて爲た事も悪く取られて仕舞へば情無い事になる。濱路は明治思想、我等は舊幕頭腦、女兒は親の言ふ事を聴くものとはかり染み込んで居る

ので、つい進げまじやうと軍木さんに約束したのが乃公の過失。しかし今となつてはもう後へも前へも行かぬ。女兒が承知致しませぬとは云つて出られない。同じ御用商人でも大倉や高田のやうに大きくなれば、大臣は更つても商人は變らな、乃公が彼等のやうならば随分濱路の思ふやうに仕舞ふ力も有らうが、今の乃公位のところでは然様は行かない。箒上さんや軍木さんに睨まれては身代の破滅になる。といつて戀愛神聖論には、天保度の老人の、總入齒の齒なんかは逆も立たない。六十過ぎて落魄れるのも口惜しい。寧ろ一と思に此苦しみを免れやうと、龜篠乃公は既覺悟を極めた。」

と短銃を出して咽喉を撃たうとする、龜篠慌て止むる、彈丸は一發ドンと空を射る。濱路もうろくして止むる。おべちやおくちやも駆け來りて止る。

龜篠終に振り取りて抛り出す。おべちやは之を座敷の棚に置く。

龜篠「マア危い、貴下、既の事に大變の事になるところを……。」

妻六「乘人放せ〜。短銃を遣せ〜。生きちやお居られない、死んで仕舞ふのだ。」

濱路「御父様妾が悪う御座いました。御免なすつて下さるませ。」

と止めながら泣沈む。

妻六「何、乃公が悪い！ 乃公が死ぬ。」

濱路「何様か然様仰あらないで、御堪忍なすつて。」

龜篠「それぢやお汝、箒上さんへ嫁くとお云ひかえ。」

濱路「ハ、ハ、ハイ。」

と咽んで泣き伏す。

妻六「イヤ嘘だらう。嘘だらう屹度。」

濱路「勿體ない御父様に何で嘘言なんぞと。」

龜篠「濱路も全く後悔して居りますから。」

と云ひながら顔見合せて眼で笑へば、おへちやおくちやはホッと息つく。
基六「其を聞いて漸と安心したが、何だか甚く萎頓して仕舞つた。」

といふところへ、電話の鈴蔭にて鳴る、頓て小婢入り來り、
小婢「旦那様、軍木様から御電話が掛りまして……。」

基六「オ、然様か、ヤレ世話しないだ事だ。」と立つ。

五、犬塚邸外

網干左母次郎洋服姿、自轉車に乗りて出來り、下りて其のアセチリン洋燈を
黒き寫眞のビント巾にて叮嚀に包み、火光の洩れぬやうにし、闇夜を徐々と
注意して自轉車を推しながら進む。

網干「忌々しい老態め、此の乃公を出し抜いて、簾上を入れやうとしたつて然様巧
く行くものか。」

濱路海老茶袴、網干と異なりたる方面より燈火の點けて無き自轉車を推しな

がら出て來る。四圍に注意して人を忍ぶ様子。

濱路「マア首尾よく此處までは抜けて來たけれど、餘り闇いので恐いやうだワ。」

網干「見やがれ糞老夫、此方の作戰計畫を。」

濱路「死なうか何様しやうかと思つた箭先に、思ひ掛無い戀しい方の。」

網干「彼奴のらしく書いてやつた英語の手紙。」

濱路「立つたと見せて實は立たずに、妾を案じて、密と戻つて、これ〱のところ
に隠れて居る、つきつめた事になつたらば尋ねて來いとの嬉しい御知らせ。」

網干「家を出る法、走る法、時刻、行く先、手を取るやうに、殘らず教へて遣つた
から、迷つて出て來る蝶々が、大抵此の蜘蛛の圍にやゝ罹りさうなものだ。」

と笑ふ。

濱路「早く家の近所を離れて仕舞つて……。」

と無言になりて車を推しつゝ行く。網干も進む。袖觸れ合ひて一寸互に訝か

れど、護謨靴同士の音も無く過ぐ。綱干の方は點頭きて笑ひ、遣り過して停まり、透して見て居る。濱路は少時歩みて四方を透し見、燈火を點じ、乗りに去る。綱干は見送りて二町も離れたらん頃、フ、ンと笑ひ、ランプを蔽へる巾を除き、うなづきて乗り逐ふ。

六、池上在林中

濱路、道路の側、雜樹林の中の幾束か作りある薪束の積み重ねられたる傍、同じ薪束の三四束散れる其の一つに、疲れて腰を休み居る。自轉車は薪束の積まれたるに寄せ掛けられて、洋燈は空しく四邊を照らし居る。

濱路「何様も分らない事ばかり！ 御手紙の通りに道を辿つて来て見れば、氣を付けて氣を付けて来て此様なところへ出て仕舞つた！ 狐に魅せられるといふ事は無い事だと思つて居たが、何だか餘りをかしいので自分で自分が信じられなくなつた！ 妾のすつかり疲勞れて仕舞つて、そして氣の所為だか胸騒ぎが爲てなら

なす！」

と愁ひ怪みて考へ込む。村の遊樂漢二人話しながら出来る。

伊太郎「遣り切れないナア、斯う不運つちやあ。」

加太郎「宜いヤナ、仕方が無え！ 奪られて歸る果報者だ。斯様して歩いてる道で何を拾はうも知れ無えわ。」

伊太郎「ハ、、、果報者ぢやあ無え、阿房者だらうよ。馬糞一つムダにやあ落ちて居させねえ世の中ぢやあ無えか。」

加太郎「遠へ無え！ だが東京ぢやあ夙起をして拾ひ物をするのも商賣になるつて云んぜ。」

伊太郎「ハ、、、何でも宜い、歸つて寐やう！ 慾ばつてもおへねえ！」

濱路「オ、、、幸ひ御手紙を持つて出て来たつて！ 読み違へた筈は無いけれども餘り不思議だ！」

と手紙を出して洋燈の側にて讀む。

加太郎「伊太郎見ネエ、茂十が薪をさつたところに……」

伊太郎「女ッ兒が居るナ。オヤ、繪圖か何ぞを見て居るやうだぜ。」

加太郎「占た！二兩や三兩は拾つたやうだよ。」

伊太郎「ン、拾つた拾つた、ハ、二人とも果報者になつたぜ。」

濱路「何様もをかしいこと！此の手紙の通りに間違はずに來ただけれども……。」

伊太郎「姉さん道が知れ無きやめ」

加太郎「救へてあげやうかね。」

濱路二人の風體を見て驚く。

伊太郎「些ばかりの骨折代を貰やめ、大森でも池上でも望の處へ、危氣も無く送り込んであげやう。」

濱路「イ、エ宜うございませす、妾の道は知つて居ます。送つて貰ふには及びません。」

加太郎「それぢや大に手数が省けて宜い！ヂャアまの骨折代だけ貰つて置きましやうかね。」

濱路自転車を引き寄せ、隙を見て乗つて逃げやうとする。

伊太郎「ドッコイ姉さん、然様は行かねえ。」

と立塞がり、搦みか、つて強請る。網干左母二郎濱路を跟けて來り、此の體を見てハ、アと合點し、自転車を物蔭に置き、手頃の薪を一本引抜き持ち、

濱路を追ひ來る伊太郎を出合頭にシタ、カ撲りて倒し、加太郎の呀と驚くを横薙にして右の手を撲つ。

左母二郎「夜道に妙齡の婦人に對して、汝達は何を強請するのだ、脅喝取財に問ふて呉れるぞツ。」

と罵る。伊太郎は額を抑へ、加太郎は手を振り振り逃げて、

伊太郎「痛え、痛え、逃ろ逃ろ。」

加太郎「不運つて居る時は何をしてもへまだ。」

伊太郎「果報者にやなりそこねて。」

加太郎「ふたれて歸る。」

伊太郎「阿房者たア。」

加太郎「素人芝居で、も無くつちやあ。」

加太郎「演れねえ役廻りだ。」

と逃げ入る。濱路ホツと息つき、

濱路「お蔭さまで、詰らない目に逢ひますところを助かりまして……」

網干「濱路さん、何も禮を仰あるには及びませんよ。」

と云はれてエ、と驚き、顔を見んとするに對ひ、

網干「網干です、左母二郎です。」

と薪を捨てる。濱路又新に訝り怪みて、

濱路「オ、貴下は網干さん！ 何様して今頃此様なところへ？」

と且懼れ且疑ひて深く思ひ運らす。

網干「マア濱路さん、聞いて下さい。」と薪束へ腰を掛け、直とついで、

網干「貴嬢にやあ御話し仕無くちやあならない譯が澤山あります。ヤ、だが此處ぢ

や何様も爲様が有りません、私と一緒に御出下さいまし。」

濱路「エ、貴下と一緒に？」

網干「ハイ私と一緒に」

と此の問答の間に手拭の鉢巻したる加太郎手拭にて手首を巻きたる伊太郎

たそつと出で來り、二手に分れて、伊太郎薪を拾ひ左母二郎に投げ付け、

伊太郎「何でえ、胡麻の蠅野郎、氣障野郎。」

と遠くより無茶苦茶に罵り、種々のものと手當り任せに投げつける。

網干「汝ッ此奴等ッ。」

と追ふ、伊太郎逃げる、網干追つて入る、其間に加太郎急に出で、自轉車を奪はんとする、濱路慌て、防ぐ。それを無造作に蹴倒して、網干の去りし方を見やり、

加太郎「阿房者ヤ、醜状を見やがれ、此方はとうとう果報者になつたぞ、戦利品々々々。」

と二つの自轉車に乗り一つのを挽きて駆け去る。網干引返して追ふ。加太郎に引違へて年三十餘り黒木綿の紋付羽織を着た壯士、土井の土太郎急ぎ足にて出来る。雙方衝突りて互に一間ばかりづゝ退く突壁に土太郎探見電燈をバツと照す。

土太郎「ヤア網干巧いところ逢つた、汝を追つて来たんだ。濱路さんを釣出して思ふ様には爲せんぞ、藁六に頼まれて土井の土太郎が、取返しに来たからは尋常に渡せ。汝の穴の池上に狙ひを付けて来た位の此の乃公に抵抗は無益だ。四の

五のと吐すと撲き倒して引縛つて、誘拐犯で突出して呉れるぞ。」

網干「生意氣を云ふナ、釋迦に説法だ。誘拐犯で押へられるやうな尻尾は出して居ない。野暮な事を言はずとも黙つて歸つて呉れ。ネ、土太郎君。眼鼻は屹度付けるから、ナ、オイ土井君。」

土井「馬鹿にするナイ、天下の壯士だ。藁六に頼まれた以上は何でも濱路は奪る。」

網干「何だ」と、

土井「何も屁茶無苦連もあるものか、世の中の極意は腕力にあるのだ！」

バツと電燈で照らしては洋杖で薙ぎ、バツと照らしては薙ぎ立てる。網干は大きに不利益にて、背後から打たれたり横から打たれなどし、自分は薪にて空ばかりを打つて居る。其中考へ浮めて一間ばかり離れ居て、薪を投げつけやうと身構へ待ち居る。土井のバツと照す途端に巧く投げつける。土井倒れる。占めたりと網干飛び付いて咽喉を締める。土井ウンと絶息する。締めら

る、際中足をバタ／＼させる。それに隠られて悶絶し居りし濱路息と吹き返し恐る／＼逃げ出す時、雲薄れて二十日過ぎの月の光り射す。左母二郎濱路を曳き戻して、息氣をはづませながら、束薪に腰をかけ、

細干「習つた柔道が役に立つて、やつと絞附けて呉れた一時殺し、どうやら土太郎は對治したが、こんな恐ろしい事を仕出したのも、誰の爲だと御思ひなされるー、濱路さん。悉皆貴嬢から起つたことです！」

濱路「エッ。」

細干「こんな事を爲るまでも貴嬢を想つてゐる、私を種になすつちやあ餘りでしやうぜエ。」

濱路「何でござんすすつて？ 氣味の悪いー」

細干「實は貴嬢を偽手紙で、此處まで釣り出したのも私の細工。」

濱路「エ、ッ。」

細干「すつぱり何も彼も打開けて仕舞へば、濱路さん卿も覺えが御有りなさらうが、私が貴嬢を思つて居たのは長い長い事です。ところで過般墓六さんが私に向つて、所以あつて信乃に渡してある村雨の寶石、それをさへ掠奪へて奪つて下されば濱路をわけます。故障を云はうといふ信乃は硝子壁を壊いて、歐羅巴でまごついて死んで仕舞へば其迄の事。壁も濱路に添へて貴下にあげますとの勧めに乗り、とら／＼珠を掠り替へたのも貴嬢を思へばこそ。」

濱路「エッ、あの村雨の寶石を掠奪へて!!」

細干「手にして見りやあ驚いた稀有の寶石！ ころやあ萬一墓六さんが此珠が欲しいさに、濱路さんを囮にして私を囮の欺、どうせ終にあ私に呉れるといふものなら、寧ろ私が預かつて置いて様子を見たが好いと、墓六さんには代りを宛行ひ、真物の壁は私が持つて居ると、案の定籠上の忤に貴嬢を興るとの談、囮られた欺されたと腹は立つたが、出刃を振り舞はして暴れ込むよりやあ一ト思案と、タイ

ライターで書いた英語の手紙。縁が有りやわること。濱路さん。貴嬢が此地まで出て来て下さつた！ 犬塚に義理を立てるよりも、網干の情を推量して、私と一緒にサア是から……。チアンと手配させて待たせてある家があるのです、左門二郎ですもの拙い目は見せません。あとは壁を外國でさへ賣りやわ自由自在、新婚旅行世界漫遊、太平洋の浪枕も意氣ぢやわ有りませんか。さ、手を引いてあげましやうか。負つてあげましやうか。」

と末は猫撫聲になる。濱路これを聞きながら或は怒り或は恨み或は泣き或は驚き、終に決心して寶石を奪ひ去らんとす。

濱路「天縁が有るか無いかは知りませぬが、そりやわ網干さん眞實でございますか。第一寶石を貴下が持つてお出なさるといふ、それが乾度眞實でございますか。」

網干之を聞きて悦び笑ふ。

網干「ヤ、さう寶石の有無を質すところは有り難い。阿賄物の有無しを聞いて置い

てから挨拶を仕やうなんて、イヤ濱路さん！ 當世當世。月下氷人の寶石は此珠。是、これを見て安心なさい。」

と懐中より寶石を取出し見する。寶石はツツと光る。濱路腰より竊に短銃を取出し右手に持ち、左手に突然寶石を奪つて立ち、

濱路「竊盜詐欺の卑劣漢！ 寶石は妾が犬塚さんに返す！ 抵抗すりやわ……。」

網干「ム、ム、ム。」

と身を退きて、憤り悶ゆる時、月に雲かゝり、四海暗くなる。網干占めたと身を忍ばせ、珠の光を的に突然濱路を抑へて短銃を奪らんとす。與らじと争ふ中、引鐵わやまつて下りてドンと濱路の乳の下を撃つ。

網干「エ、此の董狂女め、何を仕やがる！ 信乃に添ひたかあ地獄で添へ、ザアお見やがれ、好い姿だ。夜更けの間道、人は無し、世迷ひ言でも云ふならばドレ些の

問聞いて遣らう、下手な小説位にやあ聞けるかも知れねえー」

と寶石を懐中にし、腰を掛け、短銃を手近に置き、濱路を引立て、ころがし捨て、懐中よりマニラを取り出し、西洋火打で火を打ち、パフッ／＼と喫す。濱路やうやく起上り。

濱路「エ、恨めしい左母二郎、悪事を助け、人を欺し、犬塚さんを陥れ、妾を殺す毒悪邪慥、せめて眞身の父様や兄様に、知つて頂きたい身の成行、御懐かしいと明喜思へど、終に一ト度御顔を見ず、數年前に破産した鍊馬銀行の重役とのみ仄に聞けど名も知らず、たゞ犬塚の娘となつて、非道の親の蔭に育ち、約束をした信乃さんとも、泣いて別れて程も無く、斯様な目にあふ情無さ。心元無い信乃さんの御身の上！ 悲しい！ 戀しい！ 遣る瀬無い！ たとひ此の身は此處に死ぬとも、魂魄脱けて天翔ける禽に身を假り御跡を慕つて……。」

此間に月復出づる。

左母二郎ブツツと長く烟を吐き、又大欠伸して、

左母二郎「イヤ道理だ、御道理だ。いはれを聞きあ有難いが、親に取つちや孝女でも、信乃に取つちやあ貞女でも、乃公の爲にやあ何にもならねえ！ 惜しい事に善音器を持つて来て吹込んで貰ふと、簾上の馬鹿野郎なんぞに値賣りが出来たものぞ！ 夜道の用心の積りてか自己が持つて来た自己が短銃で殺して置けば自殺とより他は爲りやあ仕無い。ドレ引導を渡して遣らう！」

濱路「殺すなら殺すがよい左母二郎。生命は奪られでも戀は奪られぬ！」
網干「チエツ忌々しい此の董狂女、董狂女、董狂女め！」

と短銃の曳金を引かんとする時、意外のところより薪を掛聲して左母二郎に打付ける。網干倒るゝところへ帯の付いたる玉羅紗の大外套を着たる髪長く鬚髯濃き男現はれ出づる。網干復た短銃を握せんとするを仕込杖にて抜打に切る。倒れて寶石疵口近くに現はれ光る。男、それを取り上げ

男「フーム、美麗なる稀有の寶石、圖らず我が手に入つたのは我が大望の、漸く成るべき吉兆に見ゆ。」

と悦びて寶石を見る。こゝへ犬川莊介握り太の太の洋杖を突きながら出て来る。

大川「夜は何時か知らん、此處は何處か知らん？ 歸京の途中精力養成の爲に時々

傍路へ入つては夜道をするが、扱さつぱり面白めに會つた事もない。」

と獨語り、此の體を見て樹蔭に止まる。男は刀を収め、漢路を介抱す。漢路

驚き逃げんとす。

男「恐るゝには及ばん、氣をたしかに仕て我が云ふところを一通り聞け。」

漢路「貴下は一體……。」

男「汝には異母の兄の犬山道節！」

漢路「エ」

と驚き面を見る。

犬山「お前を犬塚の養女にして後、程經て鎌馬銀行は倒れ、吾家は衰へ、それから貧苦の中に人となつた我は富豪に衝突し社會主義、飽まで貧者の味方をして、次第に集むる社會黨、一ト旗擧げる目論見に肝膽を碎き諸處に出没し、官吏の眼を逃れ、らに徘徊して居て、圖らず汝に環り會つたので、妹と知つては對策も無く、左母とか云ふ奴を斬つて棄てた。も少し早く來れば宜かつたものと、妹、殘念な事をしたが是も天命だ、神なりと佛なりと心靜かに頼め。」

漢路「かねく御慕ひ申して居た、兄上様に御眼にかつて、此様な嬉しい事はございませぬ。神より佛よりたゞ一つ、心がりの信乃さんが上、網干が取つた寶石を犬塚さんに渡して下されば、妾は何より彼より有り難く思ひます、他に此世の望みももうございませぬ。」

犬山「ヤそれは道理の依頼だが、此の寶石の手に入つたこそ幸ひ。貧乏人の奇合故、

心は逸つても運動費の足らぬ、吾が黨の爲に賣り飛ばして、莫大の運動費を調達せん。此は黨の爲、それは私情、汝は婦人の情、乃公は男兒の意地、氣の毒だけれど信乃には渡せぬ！」

濱路「それは餘りな……。」

犬山「イヤ是非が無い。」

濱路「とは仰わつても……。」

犬山「汝は戀愛神聖論でも、此方は大望成功主義ぢやない。」

濱路「呀と叫び絶望して死す。犬川始終を聞き、扼腕して進み出で、

犬川「其の寶石を此方へ渡せ。」

犬山「何だと、」

犬川「犬塚信乃が無二の親友、犬川莊助が義によつて、腕力にかけても取らにやあ置かんのだ！」

と羽織をヒラリとぬぐ。

犬山「フハ、フハ、フハ、フハ、何を下らん！」

時勢後れの孔孟主義、仁義

呼はり徹ツくさすわ。」

犬川「馬鹿云へ、道義に古今は無いわい。」

犬山「汝は汝、我は我だ。」

犬川「オ、汝は汝歟、我は斯様する。」

と引き止める。

犬山「我は斯様する。」

と振拂ふ。犬川打つてかゝる、犬山も引抜きて争ふ。次第に烈しく闘ふところへ夜行巡査出來り、角燈の光ピカリツとする途端に犬山いつれへか消える。

稅

税

大晦日が飛んで来るものにもあらねば、定まつての年の關を、間際になつて越え兼ねるとして、むづかしい顔付に入の字を彫らずとも好さうなものゝ、十人が九人まで普通の日には遊び暮して、極月中旬から急に恰憫らしい様子するも拙く、二十八日二十九日、三十日と過つては大路行く足音も焦立つて来て、往來に服尻の下つた男の無くなる様なることをかしかれ。三百六十幾日を自己が好に使つた税に、「若さ」を納むる歳の暮、やつさもつさに皆老けた面の見とも無く、「たい今納めさす、たい今納めさす」と最非無く覺悟は極めながらも、「わはれ此のところを晦日がもし四五日も向ふへ寄つて呉れたらば」と未練な慾を思はぬは少し。彼屋の徳永才助、これも納税日を鼻の頭に控えて、何様も年の取れの遺恨の苦しみの餘り、云ひ披けのならぬ借金を尻に聞かせる覺悟して、我が家々後に電車の一

ト走り、折靴一つを小脇に根岸の昔友達を尋ね、間が好くば金も借りたし、貸し
 さうにも無くば小半日を遊んで、苦しい時の隠れ家に仕舞ふつもり。日頃の
 無沙汰は遠慮と先づ勝手宜く理屈を付けて、御免なさいましと訪問へば、十三四
 の世馴れぬ小婢が出て、御不在との言葉に、艶氣も無ければ、膠もそつても無し。
 此奴小金の有る若隠居め、何處へ遊びに失せたか、それとも昔友達の乃公のやう
 なのを恐れての居不在かと貧から廻り氣さへ出て、面白からず溢るゝに名刺の
 置き棄てをして門を出でんと仕つゝ、偶然見れば美男蔓の絡みし四ツ目離を境界
 にしての彼方は、此も世を樂に經る賢い奴なるべし、四十七八の働き盛りの男な
 がら、下に秩父銘仙の新しきを着て上には御召の無地の羽織のトロ〜になつた
 のを被り、日當りの小椽側に水筆ひねくり廻して萬年青の世話に餘念無き眼つき
 なり。葉一枚が幾千錢の萬年青かは知らず、悪く世の中を下眼に見た奴と小面憎
 くて男振をよく見れば、鼻高く、つんとして、眉長く伶俐氣なところ、酔つたら

高慢に一中節の一トくさりも、素人には聞き取れぬほど變挺に語りさうな様子な
 るに、え、乃公も彼の位な役を勤め兼ねる俳優では無いに、チヨツ忌々しいと目
 を逸らせて門外に出れば、萬年青の甲龍なりしか雪隠丸なりしかも更に分らざり
 し。阿賭物の無いほど仕方の無い事は無し、年暮に悠長らしく萬年青をこねくる
 人さへ有るのに、と嘆じながら、三河島に姪の子の縁づけるがありしを思ひ出し
 て、段々と辿り行く途、これはまた柴垣の工合宜く込みて茂れるが中に棟高き茅
 葺ありて、二十三四の女の聲の媚めかしく菜の重量焼魚の重量を論ずるは、鶯か
 なぞの小禽を飼ふなるべしと想ひ遣られたり。小摺鉢、小摺子木、絹布づくめの
 袖より洩るゝ眞白な腕、紅い襷、高髻か廂髪か知らず、若ひ女二人の小鳥の世話
 焼話しは扱も寛濶也。此様な調子では此家の茶間には年中「時好」が轉がつて居
 て、元祿談にも既倦きたといふやうな事なるべしとずつと通り過ぎれば、つい我
 が眼の前を、お下髪にした頭に華やかなリボンを惜氣も無く付けたる少女二人の、

仲好しと見えて饒舌り饒舌り行く。聞くとも無しに聞けば、福引の謎めいた趣向を互に語つて、大伴黒主は炭團で、小野小町は玩弄品の電車の切符よ、大根の皮剝器は兒島高德で、澤庵は義士四十六人よと何か分らぬことを一人がいふ。其の澤庵は何様の譯と一人が問へば、だつて大石の下に居ますからと答へて二人一所に笑ふ。何も彼も若い中の事、も一度彼の年になりたいと思癡が少し出て段々に先へ行くに、二十二一わたりの若い書生風の男の、昨日床屋で焼紐を當てさせたといふ頭髪したるが、本郷座は何様、東京座は何様と一月狂言の豫想評を仕ながら来る。いよゝ世帯の苦が厭になつて、乃公もまだ三十を越したばかり、身の持ち方一つで彼様な事を云つても過ごせる世を、自分から癖の首椀子の手械して、不自由に暮らす事と、飛んだところで自己が女房を構恨みする事、人は腹の中が一々外面へ出ぬで仕合なもの也。次第に人家淋しき方へ出外る、時、見入れ美しき氣取りのある庭の奥に小さな洒落た家ありて、其中より爪弾の優しく静

かな音するに、これはと見れば平假名で苗字ばかりの小名札あり。筆つきに見覚えあれば疑ひも無く十何年は逢はねど知つた中の男なり。味を遣り居る哩と突然ずつと入れば、此は珍らしい、君であつたか、今日斯様して尋ねられやうとは夢にも知らなかつたといふ。塵も留めぬ床の間には水仙の投げ挿し、爐には釜の煮えながら茶を點てたりとも無し。室の中に正宗の香残りて、今已みたる三味の音に考ふれば、客無しの樂しみ飲みを仕たるかと思ふ時、茶菓を持って出で來れるは今までの色音の主なるべし、人に臆せぬところに前身は見えて透きたる一寸した女なり。主人に眼をせして酒を出さんか出すまいかと問ひたるが、ばらりと眼ばさきして酒には及ばずと主の止めたるに、するりと逃いて其後は聲もせず面白くも無き二十世紀大勢論を惡堅く仕掛けられ、何の今まで相酌の興に入りながらと、先方の腹のわたじけな冷さが分つては、九谷の鉢から羊羹を摘む氣にもならず。然様なら又と其家を出て、いよゝ田圃中を行けば、銃獵出立の三十

男疲れ切つたボインターを曳いて歸り来る、此方からは又何處の池にでも行くか五十男の薄寒げなるが釣の道具提げて行く。一人は萬に足り、一人は萬に缺けながら、貸借の面倒を壁にして慾の無い慾に耽るは同じ事と其の身の羨ましく、何様せ貧すればどんつく布子の重着して寒鮎釣の力無き樂みも却つて賢いやうなもの、いや彼の様子では正月も鮎あつて餅の無いかも知れぬ事、些嬉しく無しと、五六丁連立ちし後分れて目ざす家に着けば、堀立柱の門内に屑屋を呼び入れて今押問答の最中、入るも氣の毒と物陰に佇みて聞けば、四十錢といふ事は無い、も少し買へといふ。いえ、何様して然様は参りません、精々勉強したところでございます、一夜明けましたれば、もすこし價を善く頂戴も仕ましやうが、暮でございますもの、何様しても年越しの擔ぎ物でございます。月琴は二歳になつたからつて別に高くは賣れませぬから、それでお厭ならば取つてお置きになるが宜しうございませす、と云ひながら月琴を押戻したる様子、手に受けて賣手は取つたりや、

何程四邊に人家の無ければとて、上四上四合四と鳴らして見て、これ此通り善い音がするものを、餘り酷い、と未練らしく歎ずる。何に致せ、それで御厭なら御免と屑屋の逃げ口上。袂を抑へて又一と口説。と、四十五錢で買つて仕舞つてから、屑屋も鳴らして見て、自分の物と仕て見れば褒めたい歎、ほんとに良い品でございます、と云つて此方へ出て來りたり。餘りの事に我も錢無しながら屑屋を呼留めて、何と其月琴を汝の家で年取らせたとて興も無い事、利を見りやあ商買は早い本道だらう、五十五錢で買はう、買つたところを見て居たのだといへば、變に笑ひながら屑屋も思ひきつて、え、貴方も商人らしい、宜しうございませす、年暮商買です、と早速に錢に換へて南の方へ行つて仕舞ふ。折袍は懷中に仕て其の月琴を抱へ、上尺工六工と掻き鳴らしながら門を入つて格子先に立てば、音を聞くも口惜しいか御無用と尖り聲なり。ハ、乃公ぢや此の月琴ぢや可愛い馴染なのぢやと笑へば、破れ障子がらりと引明けて是はと吃驚して訝る。其形を見れ

は立派なフロックコートを一着して人に退けぬ男振凛然たり。是は何様ぢやと又驚いて段々聞糺すに、何も彼も賣り盡して此衣一つを整へ、春は午の歳、東京へ出て一ト跳跳る心算の用意、されは御覽の通り家は空々たる四壁立つばかり、妻が親の遺品と大切にした月琴さへ只今の始末、不在を幸ひと賣り飛ばしたところなのでといふ。妻君は何方へと云へば、御宅へ御無心にといふ。ハ、我等も有様は斯様いふ仔細でと云へば、亭主も頭掻いて苦い顔して笑ふ。え、運は九連環、此様な年ばかりは有るまい、祝はうぢや無いか、と云へば、御道理御道理、飲みでもしましやうと、亭主は蝦蟇口を摘み出して壺に抛ぐるに味酢漬交り儘に四五錢の聲あり。下駄を借りますと断つて、一寸そこまでと立出でたる姿を見れば、堂々たる美髯の紳士、他に着物の無ければとてフロックコート着けての酒屋通ひは哀れに立派なり。ハ、後の語り草だ、買つて来たまへ、下物もと客は自己が蝦蟇口を渡して獨り残つて月琴を取り、蟬丸が戸迷ひして眼の開いたやうな處し

て、酒を待つ間の上四上四合々、空も片曇りして時雨になりさうになつたり。

それは昨日、明くれば初鶏初鳥、芽出度誰しも税を納め済まして、勇ましい顔をしぬものは、一人も無く、初日影フロックコートに照りて、立派な紳士が、ヤ徳永君御芽出度う。

山の一家

山のーツ家

ドーンといふ山嵐の聲だ。細い枝や太い幹や、節くれ立って居る樹や、朽ちか
つた枯木や、満山のすべての樹々が、今此の冬の夕暮の薄暗い天から下りて来る
悲しい寒い風に嘯りて色々の音調を出す、それが何も彼も一處になつて混じ合つ
て、たゞもうドーンと物節しく嘯つて居る。まるで深い深い溪の底に葉は見えぬ
大瀧の響でも聞くやうに。

何の樹の葉とも分らない大小いろ／＼の枯れさつて乾いた葉が、其のドーンとい
ふ聲の中で空を舞つて、そしてハラ／＼と眼の前に落ちたり帽の上に着ちたりす
る。それから時には又それが道の窪などで小さな旋風を見せ舞つて居るのもあ
る。まるで古く盡の骸骨の舞といふものでも見るやうに、生気も趣意も何も無く、
たゞ淋しくも廻つて舞つて居るので。

見るからが陰氣臭い古びた錫の色をした雲がノーツと七分通りも天を蔽つて居る、其の端がたい僅に薄白くボンヤリ明るいはかりで、時雨か突か、それとも雪か、明日とも云はず、ソレたつた今でも落ちて来さうに、あ、襟元の寒い事である。足下は一ト歩一ト歩に暮れて、里はもう灯を點したらう。山でも巖窟の妖精がそろく、蠢めき出しさうな頃になつて来た。

そんな中をトポくと一人で上つて行くのだ。まだ數里の山の奥の、奥の奥の一ツ家を心にかけて。懷中に金が無ければこそ怖しくも無く此様な山路が歩けるが、向ふの壁のところには怖い漢子が一人居しかつて居たら何様する事も叶はない山路では無いか。

幸に金は無い。取られるもの、無いのは安心だ。身體が有るので狼だけは怖いのが拙いけれども。

草鞋が切れた。エ、棄て仕舞へ。腹中が耗つて来た。木の葉は食へない。一錢か

二錢か出せば都なら事が済む。辻の角の餅屋が豆餅を賣つて居る、切餅も賣つて居る。餡を包んだ鐵砲巻といふものも賣つて居る。烙板の上に載せて暖氣まで附けて！

都は便利だ。

戀しいか都が？

厭な事だ。

樹の葉は地に歸る。山の上の子だつた自分は山の上に歸るが宜し。

まだ五六里ある。巖の側の戀しい一ツ家までは。

吾家がまだ有るだらうか。十年立つた！

此の尾根に付いて一ト曲りすると六郎次の一軒屋が有る筈だが。

有つた！ 彼の火がそれに違ひ無し。

山懐へと一ト曲りしたら天地は暗くなつた。そして遙彼方に火の光が見えた。油

の火では無い。燃えて居る火だ。陽気で、わた、かで、紅くつて、奇麗な、小柄口で白くほくつて臭い洋燈の火なんぞで無い。あ、久しぶりで見るとドンドと燃える火だ。

生きて居たナ六郎次は。今夜は木の葉の吹溜りに寝ずとも済んだ。あの爐の傍で和衣服を仕やう、稗園子位は食はせても呉れるだらう。

六さん、六さん。六郎次ヲチサン。

入れエ、誰だえ。おれが名なんぞ知つて居て!

一造だよ、巖の側の一造だよ。

一造だア! ウン然様か! 矢張り一造の顔だ。遠ひ無い! 何様した?

歸つて来たのだ。

歸つて来たのか。

巖の傍の吾家が戀しくつてネ。

ハア、一昨年の雪崩で形無しになつたア。

パチリッ。爐の火は大きな音をさせてハゼた。男は惘然として言葉無かつた。

それでも上へ登るか。

乃公家にでも居るか。

汝の家の跡何も有りは仕無い。たゞ巖ばかりボツカリと立つて居るだア。

でも巖だけは立つて、呉れるのかえ! 普通通りに。

ム、巖は矢張り突立つて居るだア。

それでは明日は上らう。今夜だけ留めて貰つて。

登るつて、上の方へか。

あ。

何も有りや仕無いつて云ふのに。

兎も角もマア。

巖の顔でも見たいのかえ。

然様だ。あの巖の傍で生れたんだから。

巖ア見て何様する？

次第によつたら笹葺でも建てて！

往ふつもりかえ、汝一人か。

ン、おれは一人だ。小父さんも一人か。お噂は何様した、居無くなつたか。

別の事は無い土に歸つたア。

サラ／＼といふ音が聞えて来て夜は雪になつた。

子供は？

汝と同じに里へ下つた。里から町へ、町から東京へでも出て行つたらう。

フム。

若い奴等ア溪の水見たやうに何様しても下つて行くだア。人の洗濯にでも使はれ

やうと思つて！

ハ、、、小父さんは？

乃公等アハア山沼の水で、一人で澄まして居るだ。

ア、好い！乃公も山沼の水にならうか！

勝手に住むが宜いだ。汝の故郷だ。彼の突立つた巖ア吾の親だつベエ、ハ、、、

然様だ、彼の下に寐たり起きたりして大きくなつたのだつた。これから歸つて復

あの岩の下に寐起き仕やう。

抱へるやうな彼の巖に抱かれてナア。

然様さ。なつかしい彼の巖に抱かれて！

また里の夢を見てはなんねえんだよ、巖が笑はうよ。

つて来たのでは無いか。

夜は漸く更けて、戶外はゴーツといふ吹雪になつた。一造がモリツ、モリツ、と野獸の肉を喰ひ習つて居る黒い影は、熾えて居る爐の火の紅く映る板壁に濃い色の晝を描いて居る。

明治四十年十二月二十九日印刷
明治四十一年一月一日發行

玉かつら
實價金七拾五錢

版權所有



著作者 幸田成行

發行者 和野田靜子

發行所 春陽堂

印刷者 中野鏗太郎

印刷所 帝國印刷株式會社

東京市日本橋區通四丁目
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
東京市京橋區築地三丁目十五番地



天の浪

- ▲第一(五版) 實價七拾五錢 郵稅八錢
- ▲第二(再版) 實價八拾錢 郵稅八錢
- ▲第三(再版) 實價八拾錢 郵稅八錢
- ▲第四 (近刊)

各冊小包拾六錢

- ▲第一 梶田半古氏畫
- ▲第二 緒崎英朋氏畫
- ▲第三 鈴木華郵氏畫
- ▲第四 編木清方氏畫

幸田露伴氏著

春陽堂發行

幸田露伴氏著

齋藤松洲氏表装 洋装美本

蝸牛庵夜譚

頁〇六三文本
圓壹金價實
錢八料包小

篇中目次

遊仙窟

我が邦最初の小説——竹取翁物語——我が邦に入りし最初の外國小説——遊仙窟——竹取翁物語作者——源順——和名類聚抄と遊仙窟と公任和漢朗詠集と遊仙窟と——基俊新撰朗詠集と遊仙窟と萬葉集、大伴家持と遊仙窟と——契沖阿闍梨の説山上憶良と遊仙窟と——遊仙窟の竹取翁物語に先だつ百數十行、唐物語と遊仙窟と——遊仙窟作者と則天武后との情話——平麻呂の寶物集と遊仙窟と——遊仙窟作者張鷟——朝野群載——梁文大鳥——唐書——洪容齋と遊仙窟作者——養武后の政を防る——新字を冷笑す——官職歴任を冷笑す——相傳の語——蘇老泉と孟子と——誤傳の語——李杜相輕——張易之張昌宗と張鷟と——張行成と張文成と龍筋風體列——容齋隨筆——四庫提要公評——龍筋風體列と遊仙窟と——遊仙窟作者の後——遊仙窟作者の思想性情——遊仙窟の註——陸佃の卓犖——遊仙窟と我が邦小説史第一頁と

閑話

追憶の慶長版七書〇黒龍事略〇詠歌本紀〇平山行蔵の著述〇浮世風呂以前の浴室に関する書〇鐘好法師〇團のあかり〇くゞき書〇須彌山説に関する書〇肝膽鏡〇細巴と三浦と〇乾山〇風來山人〇二宮尊徳〇續文獻通考〇荷子抱朴子

瑣言

四輪の花押〇四輪の書體〇四輪の前付選評〇ふたひ四輪の花押に就きて〇珍變奇算法〇三たび四輪の花押に就きて〇陰比事〇四遊記の著者〇京傳の廣告〇北齊の手簡〇なやしき句〇湯錢〇渡錢〇灸〇年寄曾我〇めくり〇三馬と京傳と〇村田屋のお熊、穴の稻荷〇一九ののんき〇前生〇宵本の末路〇似字壺〇眞顔〇俳諧節用抄〇京傳閉口〇媼夫張助賢——薛仁貴琵琶記〇馬琴と黄金の釜と〇馬琴の逃圖〇京傳の紋〇京傳自ら嘲る〇古作者の風逸〇一九書〇奥草紙の遣と文と〇通笑〇通笑の姓名〇一九ののんき〇丈阿〇音子と動物と

舞曲

舞の詞——幸若——新曲〇幸若氏系〇徳川氏時代と今と〇應仁前記と舞と〇信長と舞と〇桶狭間合戦と教盛と〇隠睡笑と舞と〇春寒獨語と舞と〇近松琪林子と舞と——出世景清——野守鏡——職人鑑——大職冠〇筑後大江村〇舞曲譜本——明曆板、寛永板、十五行本、内閣本、蓋卷式本、奈良繪本、打波、氏本〇舞曲の文法の異〇未究の問題

短詩短歌

俳句——漢詩〇内容外形の相應——短詩——雲の影通り雲——日がへり〇同分忘見——時代の塵埃

談

淡林調〇宗因——松意——芭蕉——水水の東京〇リッナヤリ拾ひ〇夜の隅田川〇將來の遊技の一大科〇遊漁の説

西行歌集

新刊山家集序〇異本山家集序

落葉籠

雁渡に就きて〇朝思暮想序〇すひかつら序〇思軒全集序

〇琴の音序

製本既成 春陽堂發行

幸田露伴氏著

春陽堂發行

葉末集

▲小林永興氏畫

實價廿五錢郵稅四錢

葉末集は露伴氏が靈妙なる筆になれる短篇四種を集めたもの、篇々珠玉ならざるはなし。對獨體の分らぬ話を伽に夜は明けて足下の白濁體一つけたる、果して何の獨體ぞ、奇男兒の奇なるは音もなく死したる後に味ふべく、一利那の妙なる其體は永劫に残るべく、眞美人の得難きは三十二相八十種好具足の美人を得るより難し。

新葉末集收むる所、曰く辻淨瑠璃、曰く寐耳鐵砲、一は上編にして他は其下編なり。骨は笠師虎吉が畢生の數寄、豪放を描き、妻を棄て家を去つて江湖に放浪し、遂に權門に入て人生の欲望を極むるの事實にして、肉は露伴氏獨特の妙想、筆路行くところ、風雲卷舒す。

▲小林永興氏畫

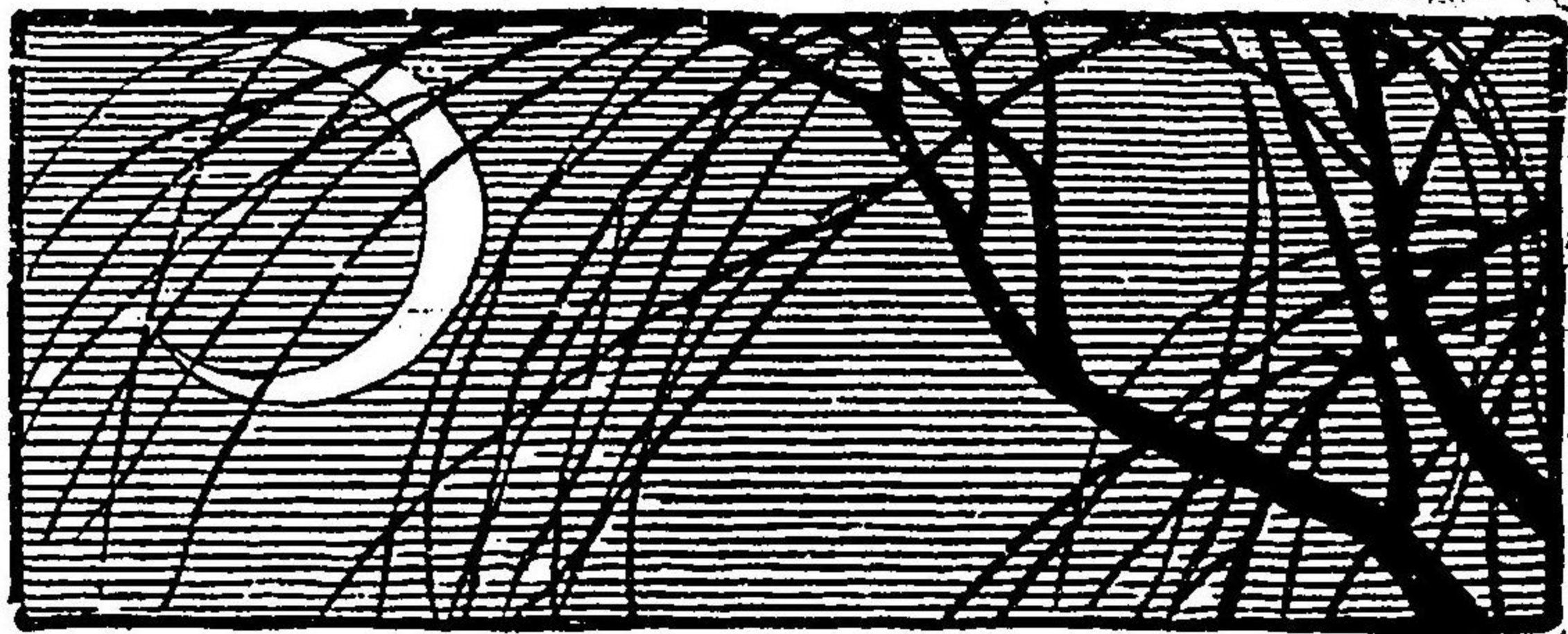
實價參拾錢郵稅四錢

新葉末集

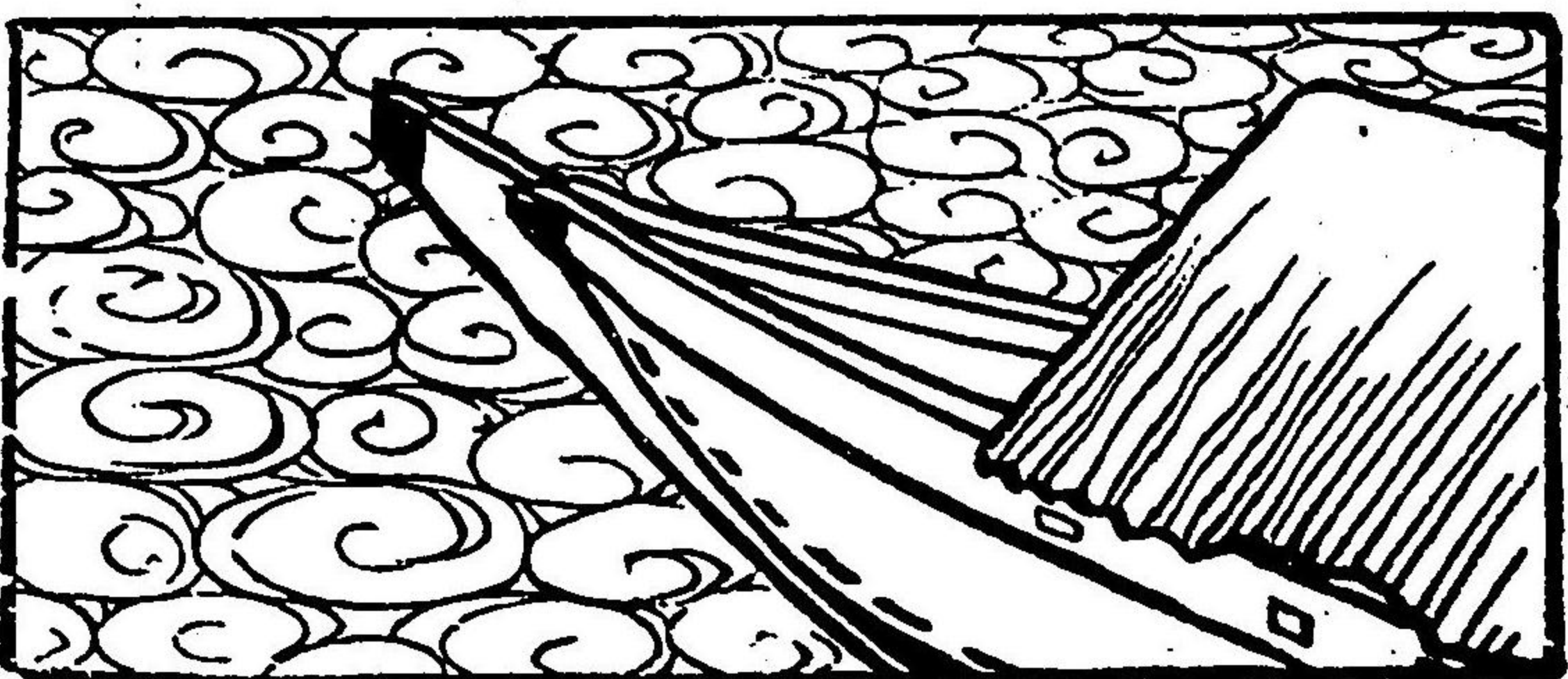
▲調言

上製(實價各壹圓) 並製(實價各七拾五錢) 小包料各八錢

長語



長心の出
詩とあつた



幸田露伴氏著

郵實 價金 八拾錢
稅金 八拾錢

寶

寶

著氏伴露田幸

畫氏舟曉代田

*

の

畫插山の寶
葉八十
畫插藏の寶
葉六十

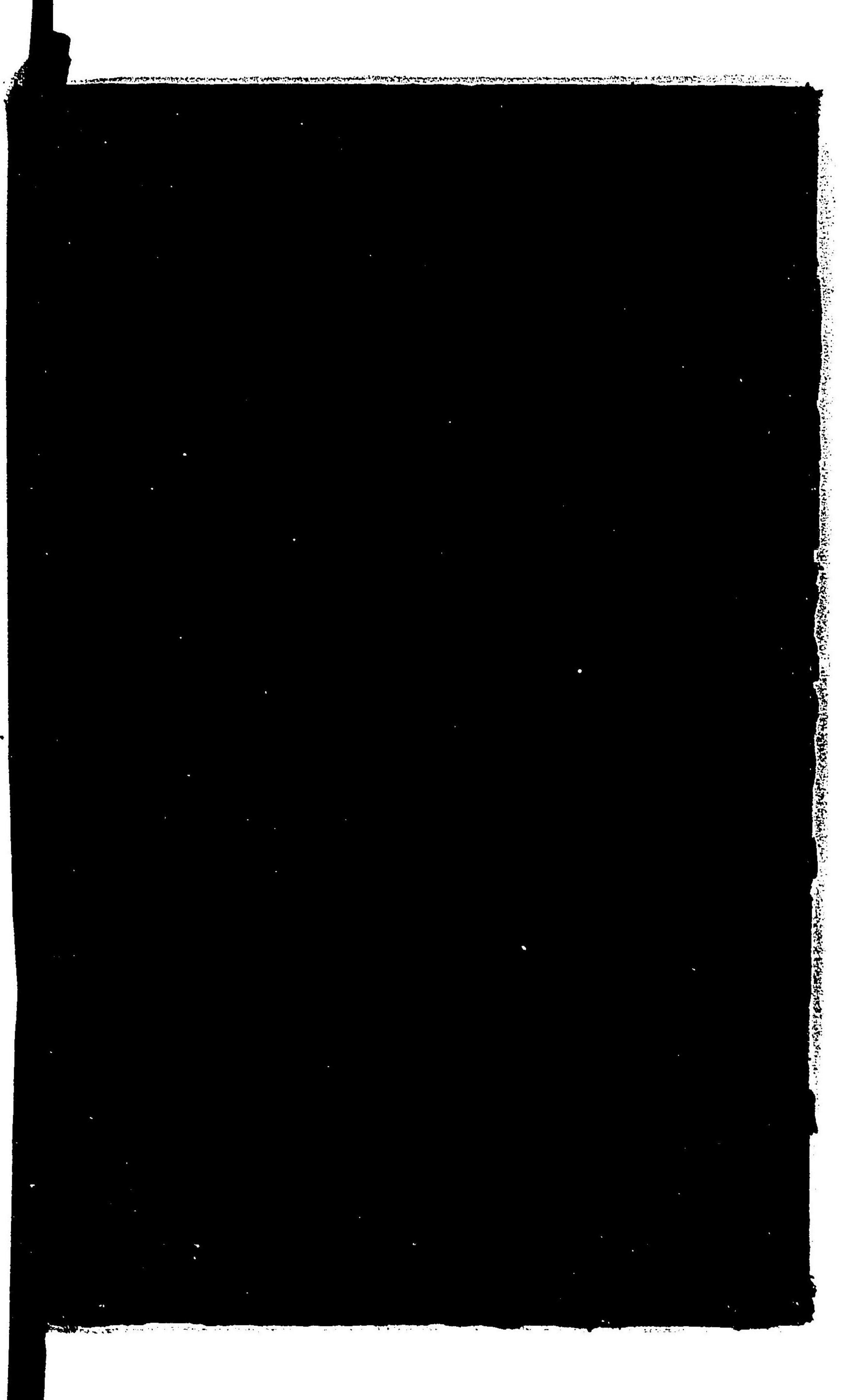
の

錢拾貳各價寶
錢貳各稅郵

藏

山

26
439



26
439

094425-000-0

26-439

玉かつら

幸田 露伴/著

M41

DBQ-1935



